

325
179

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50^{6m} 1 2 3 4 5

始



2.10.27

325-479



演說
說教

一
諦妙旨談

本派本願寺
巡回布教使
藥師寺晃照述

全

大正
6. 2. 12
内交

自序

佛教に眞俗二諦の説あるは人の普く知る所。而して我が眞宗に亦此の説あり。所謂眞諦門とは安心立命、出離解脱の要道にして、俗諦門とは人として此の要道を進む向上的生活を云ふのであります。前者は信仰そのものであつて、後者は信仰後の生活であります。人誰か信念の確立を望まざるものぞ。確乎たる信念の上立ちて、念々の歡喜愛樂を欲せざるものぞ。來れ念佛者は無碍の一道なり。念佛を體既に無碍の一道なれば、信心の行者は斯の一道を潤歩するものにして、行者亦無碍の一道たること

が出来来る。看よ、この人の前には、諸善も及ぶことな
 く、業報も感ずること能はぬではありませぬか。然
 り而して、斯道に達し、斯道を歩むには、必ず四門通入
 せねばならぬ。曰く求法、曰く安心、曰く報謝、曰く俗
 諦、これである。而して之に導くには、直接法を説き、
 譬喩を用ひ、因縁説話を加へねばならぬ。之を所謂
 三周説法となす。予や茲に思ふ所ありて、先に「四門
 三周録」といふを辯ず。今之に多く訂正増補をなし、
 題するに「眞宗二諦妙旨談」を以てし、同胞同心の前に
 提供す。

幸に愛樂佛法味の一助ともならは。

大正五年十一月

著者 識す

眞宗二諦妙旨談目次

演説の部

部	の	説	演
			一。靈魂不滅の確證 (其一).....一頁
			△哲學上の三問題——△靈魂不滅の三證——△第一言證
			△釋尊の三世十方徹觀力——△正像末の三時——△楞迦
			經の懸記——△婆羅門と釋尊——△曆を見て入信せし實
			話——△マツチの功用を顯はす喩
			二。靈魂不滅の確證 (其二).....一七頁
			△靈魂不滅の理證——△火は原に波は水に歸る喩——△
			人間は十四原素の集合——△精神と時計の喩——△精神
			と肉體の關係——△數學上の活數と死數——△唯物論者

演 說 の 部

二
の難問——△精神と肉體の盛衰——△コツア中の水の喩
△水其物の實體不滅

三。靈魂不滅の確證 (其三)……………三三頁

△原因結果と靈魂不滅——△原因結果の理法——△法律
と佛教の理法——△甲乙二人犯罪の喩——△世の中の善
悪二業——△惡事の五段階級——△精神は犯罪の主體—
△精神は罪惡の倉庫

四。靈魂不滅の確證 (其四)……………四六頁

△靈魂不滅の體證——△阿闍世太子と韋提希夫人——△
出世の御本懷——△七高僧の御再來——△聖德太子の前
生——△聖德太子尊像の讚

五。三世因果 (其二)……………五六頁

目 次

△實價あるものは永續す——△世界の宗教を三類に分つ
△現在一世教——△現在と未來の二世——△常見の三世
と佛教の三世

六。三世因果 (其二)……………六三頁

△亞米利加發見の例——△小の三世と大の三世——△人
間一生の因果——△力士の風呂入の喩——△現世祈禱と
三世——△怠惰もの神祈の喩——△神祈の益なき例

七。三世因果 (其三)……………七四頁

△當るも八卦當らぬも八卦——△日の吉凶は人にあり—
△戦争に就て日の吉凶

八。三世因果 (其四)……………七九頁

△大の三世因果——△心理學と佛教——△未來世の用意

△凡眼で見へぬ種々——△現量、比量、聖教量

四

九。宗教とは何ぞや (其一) 八九頁

△はくらん看板の話——△宗教の功能——△久米島の葬式泣役——△宗教は精神の食物——△佛教の四食——△梅林と聞き渴を癒す喻——△提燈と釣鐘の畫圖

十。宗教とは何ぞや (其二) 一〇頁

△佛教大海の磯邊話——△宗教の名稱三義——△宗は心の主なり——△心學と宗教——△心の研究——△性の善惡について——△佛法は主、世間は客

十一。宗教とは何ぞや (其三) 一二頁

△吾人の精神——△宗教の種類——△宗教の選擇——△學術の規矩——△第一比較對照學——△第二實驗學——

△第三索跡學——△無形の宗教を分拆すること

十二。宗教とは何ぞや (其四) 一三頁

△法は大切に求めよ——△信前求法と一念の信受——△ヤソ教と佛教——△二兔を追ふて一兔を得ず——△高祖の興法利生——△イエスの來歴——△口に蜜あるものに針あり

十三。三面的の吾人なるを知れ 一三六頁

△個人的、國民的、信仰的の三面——△三面各々義務あり——△孔夫子の教訓——△石山戦争の例——△忠臣藏の例

十四。眞の幸福者 一四四頁

△幸福に眞假の別あり——△ひとりきての句——△幸不

五

演 說 の 部

- 十五。婦人教會に就て (其二) 一五〇頁
 - △婦人會の必要——△女子は國家宗教の源——△國家の解釋——△智育と德育——△四段教育
- 十六。婦人教會に就て (其二) 一五八頁
 - △胎育と家庭の必要——△師は針の如く弟子は糸の如し
 - △英雄豪傑と國の教育——△婦人は教法の本源——△婦人の感情深き證——△一家仁なれば一國仁——△婦人は三世諸佛出世の門——△麻中の蓬、管中の蛇
- 十七。道徳の必要 (其一) 一六八頁
 - △佛教の智徳兩全——△道徳は人身の食物の如し——△事物起原の二理由——△生前の常道、死後の菩提道——

目

次

- 十八。普通道徳の標準 (其二) 一七八頁
 - △人間の最大不幸者——△一家の富は一身の道徳——△道徳の有無は國家の盛衰
 - △興徳の必要——△一善なきは造糞機——△多思多恩を人と名く——△修徳に好適なる人界——△愛國利民の良術——△般の國と周の國——△道徳の羅針盤——△道徳標準の五種
- 十九。佛教道徳の羅針盤 (其三) 一九七頁
 - △眞正の道徳は宗教——△犯罪人の統計表——△論より證據——△證據より理論——△佛教の「的」は轉迷開悟——△色欲深き女に不淨觀を教ゆ
- 二十。佛教道徳の羅針盤 (其四) 二〇八頁

説教の部

△智識は道徳の先導者——△過去世の望遠鏡——△寒山拾徳羊の吸物に泣く——△未來世の顯微鏡

説教の部

第一席.....二二七頁

△御一代聞書の御文——△見真大師の御再來——△我が使に我が來にけり——△手紙にて安心の諭——△極樂へは初旅

第二席.....二二八頁

△佛法の花盛り——△寒氷熱火の苦しみ——△華池寶閣の臺
△何事も時が大事——△人身は法器なり——△迷と悟との關門

第三席.....二三五頁

目

△タノム一念肝要——△國により言葉の違——△三國言語の相違——△阿彌陀如來の仰せ——△他力に托すこと

第四席.....二四五頁

△烏と雀と親子の話——△聞思修の三慧——△聞慧のこと——△思慧のこと——△修慧のこと——△三大阿僧祇劫のこと——△計算の力は一分間に二百

第五席.....二五五頁

△自力修行と他力の横超——△芥子劫のこと——△文明開化は思案の賜——△文明の利器

第六席.....二六二頁

△油斷大敵——△美濃と近江の寢物語——△八十通の御教化
△持手と持れて扇子の諭——△ヒヨット一つも地獄——△熊

谷蓮生と非人の念佛

十

第七席……………二七五頁

△機様に就て不審——△あながちとは強ごと——△妄念は凡夫の自體なり——△生れつきの器量はなをらぬ喩——△諸佛の本願と彌陀の本願

第八席……………二八九頁

△彌陀如來に三十七種の徳號——△勸讃證護の四段——△第二諸佛の讃嘆——△第三諸佛の保證——△第四諸佛の護念
△日本一の薬争の話——△元をたゞせば皆本國

第九席……………二九九頁

△無量の菩薩他力に歸す——△六十七億の大菩薩——△天親菩薩の願生——△龍樹菩薩の願往生——△助け船の喩——

説教の部

△三界は火宅の如し

第十席……………三〇六頁

△諸宗の祖師他力に歸す——△弘法大師の入定記——△弘法大師の十無益歌

第十一席……………三二二頁

△天台宗について——△未來及び地獄の有無——△無見宗は立ち難し——△迦葉尊者と外道の問答——△石の中に火を見ざる喩——△真俗二諦の根本

第十二席……………三三二頁

△一句の聞法は多劫の神を養ふ——△禪宗も内心彌陀他力に歸す——△一休和尚の念佛三昧——△法相宗の元照律師彌陀を念す——△日蓮上人の御歌

目次

十一

第十三席……………三二八頁

△日本の神佛——△佛法と神明——△神明の御本地——△諸神本懐集の御文——△諸神の御託宣

第十四席……………三三七頁

△天照皇太神の御宣託——△後世を知らざる者は愚者——△智者提婆達多の悪計——△愚者槃特の大悟——△名荷物忘れの因縁

第十五席……………三四六頁

△此世は神様、未來は佛——△兩肩ぬぎし娘の話——△二心は神佛ともに嫌ふ——△諸神の本懐と念佛

第十六席……………三五五頁

△神道と佛道の關係——△國語學者、契沖、眞淵、本居の三

説 教 の 部

目 次

大家——△平田篤胤所立の神道——△眞神道と篤胤神道の區別——△信教は各自の自由

第十七席……………三六二頁

△神書の六趣、三世因果と四生——△諸神は佛菩薩の變化——△神官にて佛寺を建立する——△人は天地の神物、心は神明の主なり——△神明の御方便

第十八席……………三七二頁

△神宮大麻受不に就て——△將して亂臣賊子なるか——△内務省令——△眞宗信徒として受不の是非——△御神體を民屋に安置するは不敬——△御陰まいりの起原——△今日の氏神社の起原

第十九席……………三七九頁

△真宗の宗制寺法——△日本百科大字典の説——△延喜式の
二十一座——△惡事災難よけの御守——△現世祈に墮する恐
れあり——△皇祖御崇敬の意——△御大廟の古例に非ず

十四

第二十席

三三七頁

△能歸の信相と所信の法——△知らぬ人は信用し難き喩——
△彼尊の御能力——△本願寺の七不思議——△本願力の七不
思議

第二十一席

三九五頁

△無義を義とすと信知す——△梅はどのやうにしても酸い——
△世界は丸で他力——△目鼻を赤子に教へる喩——△老婆と
孫の問答——△五鈍使の煩惱——△日光で日光を見る道理

第二十二席

四〇五頁

△人の心と水月の喩——△信相について——△厚氷の日光に
融る喩——△風呂に入るは垢のま——△帳面消して資本を
與ふ——△親は骨をり子は樂をする辨

第二十三席

四一四頁

△籠耳同行——△御馳走満腹の喩——△我機の淺間敷につい
て——△提灯の恩を知りて、太陽の恩を忘る——△佛凡一體
と炭と火の辨

第二十四席

四二二頁

△世界各国の宗教——△釋迦一代の説法——△體、相、用の
三大——△餘門と當流の信心の違ひ——△誠の大將と嘘の大
將——△嘘の證據——△御苦勞の手始め

第二十五席

四三三頁

部 之 教 説

△この信心とあの信心——△言同意別の例喻——△體相用三
大と箱の喻——△小さい眼で大きな月を見る喻——△佛心を
うして貰ふか——△決定心の變らぬ辨

十六

第二十六席

四四二頁

△惡人腰押の宗旨でないか——△用ひ様にて笠となり草履と
なる喻——△善業の舌、惡業の舌——△頂生王の慈惠心の
因縁——△惡人正機の理由——△常没の衆生を愍念し給ふ

第二十七席

四五三頁

△萬機普益の徳——△始皇と燕の丹の故事——△黑鷗に食を
施し、白鷗の恩を報ず——△白鷗は正客、黑鷗は相伴

第二十八席

四六〇頁

△七不思議の内、第二名號利物の徳——△無邊の聖徳色心に

目

攬入す——△釋尊父王に易行道を勸む——△伊蘭林と栴檀香
木の喻——△六字の大善大功德と融合す

第二十九席

四六七頁

△當流の法義は名號が本體——△六字名號に十種の相あり——
△機法一體の四類と三別——△一體二相兩用と扇子の喻——
△一名號に機法の二相——△南無するものを阿彌陀する——
△牡丹餅の異名十種の喻——△從生向佛と從佛向生の相
△音響一體の喻

第三十席

四八〇頁

△機について三種の別——△所被の機、所廢の機、所立の機
△凡夫性得の、かすくの惡機——△赤子の時から三毒五欲
の機質——△片乳をにぎるや欲の初櫻の句——△佛法では性

十七

次

は不改

第三十一席

四九〇頁

△鬼が佛の不思議——△本願の七不思議——△機法一體の三機——△心の内の實際話——△姑と嫁の内心の開帳——△煩惱の所爲と、中啓開合の喩——△聖人御自行にかけての御示し——△廣大無邊の喜びに就ての辨——△極樂を思ひ浮べて喜ぶ辨

第三十二席

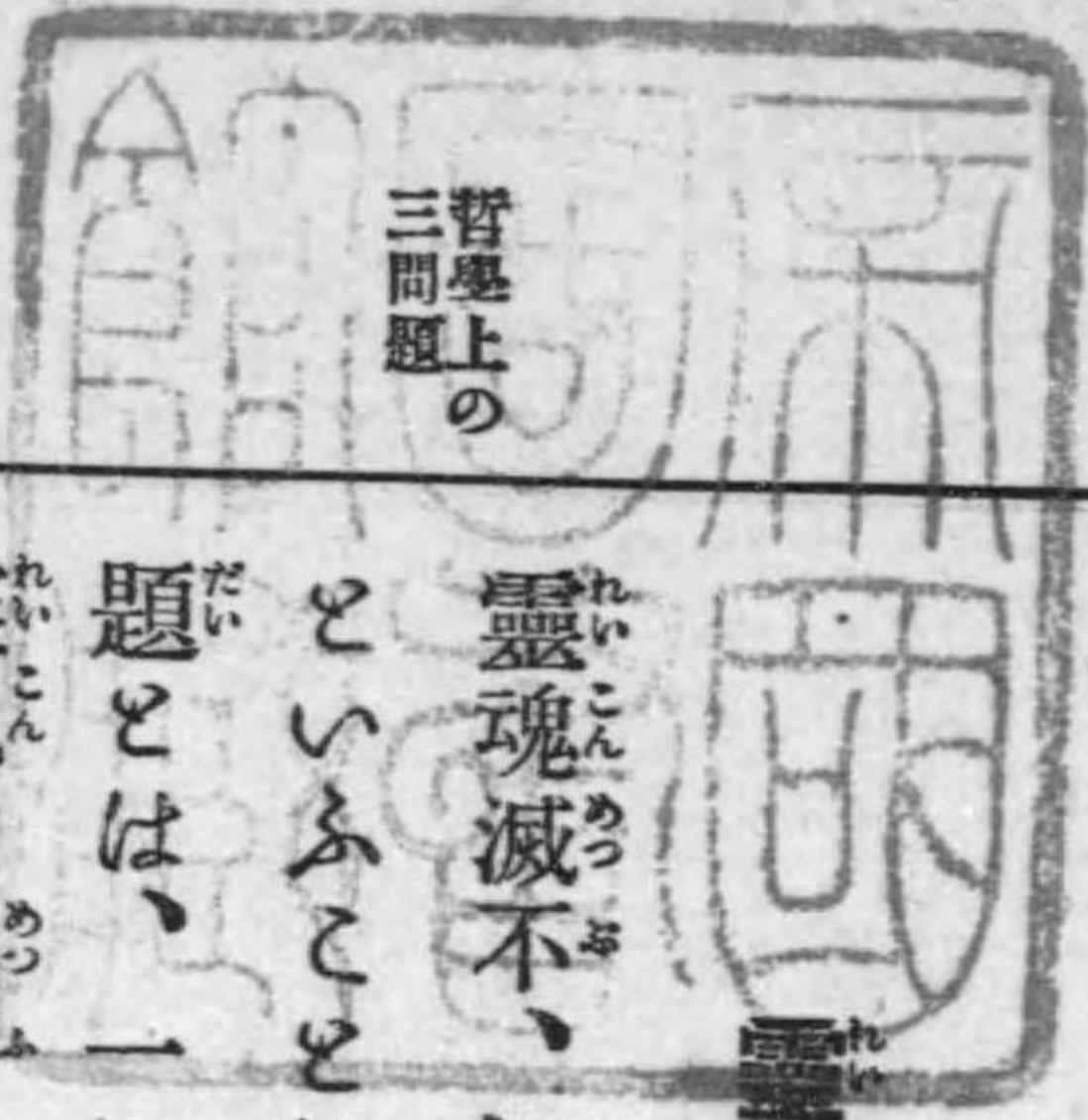
五〇二頁

△安心の骨目肝要——△所被の機再辨——△聞不具足の同行——△煩惱の厚薄と喜びの厚薄——△蓮如上人御自行にかけての御示し——△同じ梅檀香木に香の厚薄ある喩——△惑念衆生は一子の如し

説教の部

眞宗 二諦妙旨談 演説の部

巡回布教使 薬師寺晃照演述



靈魂不滅の確證 (其一)

靈魂滅不、即ち心なるものは、滅するものか又滅せざるものかといふことは、哲學上の三問題の隨一である。其の哲學の三問題とは、一には造化天帝の在否、二には世界の有限無限、三に靈魂の滅不である。かゝる大問題なるが故に、古今諸説紛々として、岐路の多きに迷ふの有様である。往古印度に行はれし、斷見外道、及び漢土に於ては朱子等の説、泰西に於ける唯物論

○靈魂不滅の確證

○流説の部

者しやの説せつ、日本最近にほんさいきんに於まては、中江氏なかえしの一年有半ねんいうはんの論ろん杯はいは、概ざいして靈魂れいこんは滅めつするといふ説せつである。又印度またいんずの常見外道じやうけんげだうき杯はいは魂たましひは滅めつせざれども、人ひとは常つねに人ひとに生うれ來くると云いふて、六道輪廻だうろんねを信しんぜず、又またデニング氏しの生死論しやうしろんの説せつにては、惡人あくじんの魂たましひは消滅せうめつし、善人ぜんじんの魂たましひは不滅ふめつなりといふ。又基督教またきりすてきの説せつは、魂たましひは不滅ふめつなれども天帝てんていの賦與ふよと説せついて、前世ぜんせいを談だんせざるが故ゆゑに現當げんたう二世教せいせきであるかく一々異説いせつを列舉れつぎよせば殆ほとんど枚舉まいぎよに違ちがはずですが、之これを要ようするに靈魂れいこんは滅亡めつぼうするといふ説せつと、消滅せうめつせぬといふ説せつとの二ふたに歸かへります。而しかして我が佛教ぶつぎやうは、もとより不滅説ふめつせつなることは喋々てふくを待まちたざる所ところであります。之これに付ついて、序論じよろん・正論せいろん・結論けつろんと分わつて、科圖かどを設たけ、縷々るる數十席すうじやく、樺太かほふまに於おいて辯べんトたこともあります。今いま回は其そのの中結論ちゆうけつろん中の確證かくしやう、即すなはち靈魂不滅れいこんふめつの明確めいめつなる

證據しやうこを舉あげて、以もつて諸君しよくんの求道心きうだうしんを喚起くわんき致いたしたひ積つりです。諺ことわざにも論ろんより證據しやうことて、證據しやうこ程明ちやうめい了りやう確實かくじつなるものはなひ、證據しやうこさへ明あかに舉あげれば、學說上がくせつじやうの議論ぎろんは煮にへ湯ゆに水みづをさしたる如ごとくちんと止やめて、以もつて實感じつかん的に宗教しゆきやうを信仰しんかうし、不滅ふめつの精神修養せいしんしゆやうをなして、二世安樂せいあんらくの身みと成なつて貰もらひたひ。全體宇宙間事物ぜんたいうちうかんじぶつの眞理しんりを研究發見けんきうはつけんするには、ヒストリカル即すなはち素跡すそせき、コンバラチーブ即すなはち比較ひかく、プラクナカル即すなはち實檢じつけんの三法さんぽうに依よるべきことは、今いま更喋々さらさらを要ようせざることであるが。これを佛教ぶつぎやうにては、聖言量しやうごんりやう、比量ひりやう、現量げんりやうといふ。今之いまこれに準じゆんじて、靈魂不滅れいこんふめつの確證かくしやうにも、言證げんじやう、理證りしやう、實證じつしやうと三證さんじやうを舉あげて以もつて明あかに、世人せいじんの迷夢めいむを攪破かくはする胸算きやうさんです。

扱三證中さてしやうちゆう、第一だいいちの言證げんじやうとは、即すなはち三量中さんりやうちゆうの聖言量しやうごんりやう（ヒストリカ

○靈魂不滅の確證

○演説の部

四

ル)にして、大聖釋尊の金言を以て靈魂不滅を證明するのである。抑々靈魂は不滅にして、無始無終に、善惡の因果に依りて苦樂の果報を受けつゝ、輪回するものなりと説給ふは、釋尊の金言である。已に釋尊の言説を、金言と云ふは、金の證文とすべく、佛語に虚妄なく、佛は眞言、實語者なるが故である。佛は何故眞言實語者にして、虚妄語なきやといふに、佛はよく徹觀の大智あるが故に、横に十方、豎に三世を、吾人が手紋を見るが如くに、見抜き給ふ。今日の博士たの學士たのと云ふたところ、一寸先きは闇、障子一重の向は見えぬ凡夫トや。其の凡夫學者が魂は滅する杯、妄説を吐て居るのに迷はぬ様に、三世十方徹觀の一切覺者たる佛説を確證として、靈魂不滅を深信して、誰の人も早く後生の用意あらんことを切望致します。

然れば果して釋迦佛は一切覺者にして三世十方徹觀力の明智ありとせば、其の證據ありやと云ふに、其の證據は、有るも有るも枚擧に違あらざる程あれども、今二三を擧げて之れを證明せば。一には佛は兼て我が法は東漸というて、東へくと漸々流傳すると記し置き給へり、果して其の通り東へくと流傳し給ふ先初は西天より、後漢の明帝永平十年に漢土に傳はり、それより今の朝鮮に傳はり、朝鮮の三韓と云ひし時の、百濟の聖明王より東方に當る日本の、欽明天皇十三年、冬十月三日に傳來し給ひ。それより現今にては、布哇より米國へと漸々に東漸し給ふ有様、實に三千年昔の釋尊の懸記し給ひしが如し。又大集月藏經等を拜見すれば、五ヶの五百年三時推變杯のことが説いてある。三時とは、正像末の三時にして先、佛御在世より、五百

○靈魂不滅の確證

五

年間は、正法といふ時期にして、自力の教行證の三のもの具足して、自力聖道の教理を聞き、難行を行して、證果を得る者が多分に居る上代である。次の一千年間は、像法にして自力の教もあり、行ずる者もあれども、證果に至る者は中々なくなる。次に一萬年間は、末法にして爰に至れば、有教無人と云うて、自力教は残りてあれども、最早實地に行ずる者がない、行ずる者なきが故に、自力の證果を得る者は一人もない。爰を大集經に「我末法時中億々衆生、起行修道未有一人得者」と説き給ふ此時代になると、自力の寺に住む出家も、妻子を蓄へ酒肉を飲食して、酒家より酒家に遊び、財欲深くなりて、在家も同然となる。此の時代に當りては「唯有淨土一門可通路」と、唯た彌陀の本願南無阿彌陀佛斗りが繁昌して、佛境界に通入すること

を得るぞよと説き置き給へり。就中今日は、末法萬年の時代なるが、諸君どうぞ、實に佛の御見抜き通りではありませんか現今でも、八家九宗トやの十二宗トやの、自力宗派や寺は澤山あれども、實地自力の修行して、佛果を得られそうな出家方が澤山に居られますか。イヤハヤ公然妻子を持つやら、秘密に御大黒を蓄へるやら、御大黒といへば、色の黒ひ者かと思れば、色の白ひ別嬪トや。袈裟掛け乍ら魚鳥の肉を食ふやら、大酒飲んで喧嘩するやら、寄るとさわると布施の多少を論ずるやら、實に哀れなことである。併し之が佛の御見抜きなることを證明するには、よき保證人である。全體自力の寺の山門に至ると、葦酒山門に入るを許さずと、石標に刻込んで立てゝあるが、葦酒、即ちなまぐさいものや酒は、山門に入ることを許さぬと禁

制札は立てゝあるが、今頃はなまぐさひものどころか、白粉臭
 ひ大黒杯が、大手擴けて出入する故、立石は吃驚して立往生と
 ておるわい。爰になると、我田引水ではなひが、見真大師の教
 南無阿彌陀佛でなければさうもならぬ。
 又釋迦如來楞伽山にて、楞伽經を説き給ふ時、大惠と云ふ御弟
 子が立ちて、佛の御滅後は、いかに成り行くものでしようかと
 尋ね給へば、佛は明に大惠并に八萬の大衆に告げ給はく、我れ
 涅槃に入るの後、斷常二見の外道起り、後生は無ひとか地獄極
 樂は虚説たとか唱へて、佛法弘通の邪魔をなす。時に七百年後
 に、南天竺に龍樹といふ大菩薩が現れ、それらの外道を悉く能
 く摧破して、遂に彌陀の本願南無阿彌陀佛を宣説し、歡喜地の
 位を證して、安樂國に生るゝぞよと懸記し給へり。果して間違

もなく、佛滅後七百年に、南天竺に出世し給ひ、斷常二見の外
 道を打破して、彌陀の本願を弘通下されたが、あの七高僧の第
 一位に在る龍樹大士である。此事は眞宗門下に在る人々は、毎
 每正信偈や和讃で拜見のことである。正信偈には「釋迦如來楞
 迦山、爲衆告命南天竺、龍樹大士出於世、悉能摧破有無見、宣
 説大乘無上法、證歡喜地生安樂」とある、これは祖師聖人全く楞
 伽經を主意して述給ひらなり。又和讃には「南天竺に比丘あら
 ん、龍樹菩薩と名くべし、有無の邪見を破すべしと、世尊は兼
 て説き給ふ」とある。世尊とは世に最も尊崇せられ給ふ、釋尊
 のことにして、兼てとは、七百年前に前以て説き置かせられた
 といふことなり、諸君實に佛の御見抜きなされたことは疑はれ
 ませんでないか。

又釋迦如來、阿彌陀經を説き給ひし、祇園精舎に在るとき、婆羅門教徒一人來りて、佛に御尋ねすらく、彼尊は一切覺にして御見抜きなりといふ、果して爾れば、此の祇園精舎の境内に、蕃殖せる木葉は、いくらありやと、小兒らしきことを問ひまゐた。其の時佛は直に何億何萬何枚なりと答へ給ふた。ところが外道惟へらく、これは我身も一々に計へて見る譯にはゆかん、それを佛は知つてゐる故、よい加減に枚數を速答せしならん。仍りて、これにてはまたく佛は見抜きの證據にはならぬと思ひつゝ、其日は暇乞して歸りた。さて其夜は大黒闇なるを幸ひに、外道は忍び足にて至り垣根の外に立見れば、四隣寂々として、釋尊も御安眠なされてある。其の時外道は木の葉を二枚ソツともぎ取り、袖の中に入れた、いかに見抜きの佛とても、こ

れ計りは承知あるまひと思ひ、翌朝早々釋迦如來の所に參り。今朝は木の葉が何枚ありますか、昨日の通りですか、幾分減つて居りますか(トテモ此の袖中の二葉は御承知あるまひと思ひつゝ御尋ね申したら。釋尊は昨夜風に依て落葉せしことはなひが、人手にかゝりて二枚減つた、其の二枚はその外道の袖中に在ると指し給へば、ハーツと外道も感伏して、遂に佛の御弟子に爲たといふこともある。かゝる事實を列擧すれば、釋尊御一代には、いくらあるかも知れぬが、實に諸君、諸君や吾々とは事違ひ、釋迦佛は一切徹觀力の大智あることは明かせう、その徹觀力を以て教へ給ひし、靈魂不滅の經説なれば、以て靈魂不滅の確證とするには、十分の價値があるでせう。私が有る地方を巡回せし時に、高等學校の教諭某氏來訪せられ

談宗教に及びし時、某教諭の云るゝに。私も初は無宗教者でありました。が、有時暦を見る間に、不圖佛教信仰の念を起し、而して來大に佛教に依りて精神を修養し、安心の佳境に遊びつゝある幸福を得ました。其理由は、かの暦なるものは、平年三百六十五日を四季十二月に分ちて、大小を附し、季節を附して、一月六日は小寒の入り、三月十九日は春彼岸の入り、九月二十一日は秋彼岸の入り、七月二十一日は夏土用の入り、杯と書付てあるが、寒に入るからとて、俄に天から寒氷りが降つて來るといふ證據もなし、彼岸に入るからとて、なにも彼岸團子が降つて來るといふ證據もなし、これらのことは、暦を頒行する人がよい加減に、三百六十五日の日柄の中へ、マア此邊を寒の入りにして置き、此邊を彼岸にして置きぐらひの事で有ふと思つて居た

が。扱其の暦に付いて感すべきは、日月蝕のことである、先本年ので申せば、一月十四日午後三時二七分三、右の下より虧はトめ、四時二四分八、右の上へ甚しく、四時四九分〇三分七厘虧ながら入る、即ち東京にて五分の日食トやと明記してある。又月食は七分二厘にして、一月二十九日午後九時〇六分〇下の右より虧はトめ、十時三三分〇下右の間に甚しく、翌三十日午前〇時一〇分〇下右の間に終ると、明かに記してあるが。時の何時何分よりかゝり方の何分何厘迄、毛頭間違なく當るとして見れば、實に暦は確實なるものトや。暦を製する人も、曆學に取つては徹觀の智力があるわい、爾は寒氷りが俄かに天から降るといふ證據はなけれども、寒に入るといふは間違ない。又彼岸團子がふるといふ證據は無れども、彼岸に入るといふは理由

があるわいと思ふに付いて、成る程佛教がこゝトや。地獄がある、極樂がある、人は死んでも魂は滅せぬと、佛は説き給へども、死んだ人が再生して、後生あることを通知した證據はなし地獄や極樂を見たものはなし、是れ全く佛は勸善懲惡の方便説の如くなれども、其の靈魂は不滅であるぞよ、善惡苦樂因果の眞理より、地獄もあるぞよ極樂もあるぞよと説き給ひし、釋迦如來は、今日の凡夫と事異り、三千年の末には、世の中はかくなるぞよ。佛法は東漸するぞよ、七百年後には、南天竺に龍樹が出て、外道を摧き佛法を弘るぞよと、説き置き給ひしことが、逐一間違なく當るとして見れば、眞實佛陀は御見拔きの大覺者である。その御見拔きの大覺者が説き給ひし佛教なれば、佛教は確實なるものである。その確實な佛説は、靈魂は不滅と

あれは、靈魂不滅の確證之れより明かなることにはなひ。爾れば昨是今非と、定見なき凡夫社會の、甲論乙駁の學説に動搖せられ、徒らに吾が精神を煩悶せしめてあらんよりも、寧ろ一刀兩斷の處置を取り、斷然大聖の眞言に歸し、靈魂は不滅なることを確信し、不滅の靈魂に對し不斷に大安慰を與へ給ふ、佛陀の大悲を仰信し、現當二世の幸福を全するに如くはなひと思ひ付ひたが、私の佛教を尊信愛樂するに至つた基礎でありますと。さも快活に談話せられたるを聞いて、私も大に愉快の感に打たれました。又側に聞いて居られた五三の人々も、廓然大悟したるが如く、ア、そうでムりまると深く感せられたことでありました。それから私も引續ひて、御咄を致しました。實にそうでムります、佛は徹觀力を以て、靈魂不滅を説き給ひ、そ

の吾々の靈魂に對して、「我見是利故說此言」と十方諸佛を保證人に立て、説き給ひしが、彌陀の本願、南無阿彌陀佛にてましませば、諸君は何卒彌陀の大悲は、我等罪惡の衆生を、このまゝ乍ら救済し給ふを深く信じて、このまゝ乍ら御助け下さることの難有やと、御慈悲の中に安住して、氣樂に極樂の大果報を期せられんことを希ひます。

諸君このマツチは磨ればポット火が出る、以て烟草を吸ふべく以てランプに點すべく、以て薪に移して食物を煮るべく、種々雑多の功用を顯すでせう。爾るにこのマツチは、何故にすれば火を發するか、その説明になると、一生涯掛つて研究しても到底研究し盡すことの出來ぬ程の道理が存して、終にはいかなる博士も、不可知的分齊といふことになるのである。況や諸君

や吾々如き、罪惡の凡夫が、彌陀の大悲を信する一つにて、佛果安養の境界に到達し得らるゝと云ふことは、二乗非所測、唯佛獨明了とあれば、到底凡夫の智慧を以て測量することは叶ひません、只安養に至りて證すべしである。爾れども、眼に一丁字なき愚夫愚婦も、すれば火のぞるがマツチである、一文不通の愚人たりとも信すれば佛にならるゝが、彌陀の大悲である。諸君萬望一心に投じ、正直に信じて、不滅の靈魂をして、長生不死の妙境界に遊ばせられんことを希ひます。先は靈魂不滅の三證中、言證の點はこれにて終結し、次に理證及び實證は、是れより追々席を累ねて演述に及びませう。

靈魂不滅の確證 (其二)

エー社會の文明が進歩し、人々が開化發達する丈それ丈、世の中は多忙になりゆき、自然寺院に詣で、宗教談に耳を傾ける餘暇を得ることが六ヶ敷相成るは、實に餘儀なき次第で御座りまする。爾るに今日は滿堂立錐の地もなき程、來集下されたは大ひに満足するところで御座ります。さうか御多忙中を折角參集の所詮には、解脱の耳を澄まして、靜聽あらんことを希望致します。

靈魂不滅の理證

又手前回に於て靈魂不滅の確證三條に分て、第一條言證を説明致置きましたたが、今席は一步を進めて、第二條の理證に付て辨明を試みませう。理證とは、世間多くの宗教家も、又學者社會も共許して、以て宇宙の眞理と認定する所の天則の原理を以て靈魂の不滅なることを證明するのである。尤世間の人類を大別

せば、無學文盲社會と、有識文明社會との二階級となる、佛教には古來之れを學者世間と、非學者世間といふ語を以て分類してある。その無學文盲社會と、有識文明社會とを通つて、之れを一括して佛は迷の凡夫と給ふ、實に迷の凡夫である。なれども自ら迷の凡夫たることを知らずして、己惚れ根性より、却て佛を輕ト、自ら佛已上なりと、馬鹿料見を起して、佛説の靈魂不滅を信せず。無學文盲社會は云く、人死せば燈火の滅したるが如く、水泡の消へたるが如く、來世はあるものでなひと自ら迷ひ他をも迷はしめて居る、これらはもとより、無學文盲社會の云ふことなれば、取詰めて其の理由は如何にと尋ねて見ても、答ふることは叶はぬ、只かく思ふ故にかく云ふなりと云ふの外はなほ。いかにも無學文盲社會の愚論丈ありて、大體其の

火は消へ
原に歸る
波なる
さなり

○演説の部

喩からが誤りて居る、人死せば燈火の滅するが如く、水泡の消へたるが如しとは、何たる間違ひの謂ひぞや。これらの人々は、火は滅して無に歸し、泡は消へて無くなるものと思つて居るが、いやはや驚くの外はなひ、火は滅して無に歸するものではない。火といふものは、酸素と炭素の化合せるものにして、ポイツト之を消しなば、燃ゆる火の姿は滅すれども、其の實體は原の酸素と炭素に歸して居る迄のものにして、決して滅無するものではないといふことは、苟も化學の一端をも學で見た人はよく承知のことである。又泡も消へて無に歸するものでない泡の相は滅すれども、其の體は原の水に歸する迄のことであるといふことは、いかに無學輩といへども、注意して見れば直に分ることである。依て是等の説は、今爰に喋々齒牙にかくる

人間は十
四原素の
集合

精神の時
計の驗

○靈魂不滅の確證

價值もなひことであるが。扱世の中よりも識者と仰がれ、自らも學者を以て任トて居る社會にも、往々靈魂滅亡論を唱へて迷執して居る者がある。是等の一人々の説は、世の中より學者と云はるゝ丈、幾分の根據を据へて云うて居る。所謂今日の唯物論者にして、唯物論者は、天地萬有は六十有餘の原素の化合より組織せらるゝものにして、人間も十四原素の化合より成るものにして、死せば十四原素に復歸する迄にして、別に靈魂なる不死の一物有て、死期轉生するものに非ず。世に所謂靈魂とか精神とか稱するものは、原素の化合上に現はるゝ作用にして、分り易く喩へて云はゞ、時計の如きものである。時計は諸種の器械を以て組織するときは、カチ／＼と鳴りつゝ回轉して、ナン／＼と時刻を報するを瞥見

すれば、ドーやら中に精神が有て、之れを爲すが如くなれども是れ決して別個の精神有るに非らずして、器械組織上の作用なることは、誰人も了知するところである。人も亦是の如く、人は能く分別し、言語し、活動するを見れば、いかにも肉體中に別個の精神ありて、然るが如く見ゆれども、是れ決して別個の精神あるにあらず、只肉體の原素化合上の作用なりといふのである。淺薄なる料見より之を聞くときは、いかにも最の如く思ふものもあるならん、然れども深く思案研究するときは、實に是れ大なる迷執である。何となれば若し唯物論者の云ふが如く肉體より別に精神なるもの無きものとせば、精神思想は肉體を本として起る可き筈にして、肉體の動靜起居が本と爲つて、精神の思慮分別は末となるべき理なり。爾れば吾人の肉體が先に

歩行を初めて、ソとしてそろ／＼歩行するといふ思慮が起り、肉體が臥床して、而後に臥床したわいといふ思想が起るべき道理である。然るに其の實際は之れと正反對にして、精神が先是より某の方面に向て歩行せんと思慮一決して、そろ／＼肉體に向て其の命令を下すが故に、肉體は起て歩行するに至るのである。精神がヤレ／＼疲勞を感じた、ドレ臥床せんと思慮を一決して、肉體に命ずる故に、肉體は命を奉つて臥床するのであるといふことは、私の喋々を要せず、諸君が自己反省して實檢し給はゞ能く分ることである。故に佛は「爲心走使無有安時」と説き給ひて、肉體は、心の爲に走せ使はれて安き時あることなるとや。サー是の一點より見ても、精神は時計の如くとやの、肉體の作用とやのと唱へて居る、唯物論者の非なることは明かである。

ありませう。又物質の原素といふものは、水素、炭素、窒素、酸素、珪素、弗素、硼素、砒素、臭素、沃素等にして、思慮分別の精神作用を現すべき理由なきものにして、思慮分別なき物質を組織する原子とはなるとも、靈妙なる知覺思慮分別の作用を爲す、精神を組織することは不可能の事である。

喩へば數學の上にも、死數と活數とが有て、一已上の活數なれば、百合せば百、千合せは千といふ活數となれども、〇といふ死數は百千萬億合せても矢張り〇といふ死數にして、一の活數をも成すことなきが如く、思慮分別の作用なき物質の原素なれば、百千萬原素を合せても、矢張り思慮分別なき物質を成する迄にして、思慮分別の作用ある、精神を成することは叶ふ可らざるの理である。又人死して後其の肉體を解剖するに、生存中

數學上の
活數と死數

と更に異動なき肉體なり、而して思慮分別の精神作用を失へるは何故ぞや、唯物論者の云が如く精神は肉體の作用なりとせば、生存中と異動なき肉體なれば、矢張り思慮分別の心的作用あるべき筈である。併しかく申せば唯物論者は、それは肉體中の最樞要なる、機關を失ひしが故なりといふならん。爾は其の最樞要なる機關とは、果して何ものぞと問はゞ、それは不可見の一物なりといふならん。爾は其の不可見の一物とは何物ぞやと問はゞ、不可知的と答ふるの外なからん。サーその不可知的不可見の物とは、佛教にいふところの、無色無形不可見不可聞の心識、即ち精神であります。精神去るが故に肉體は依然としてあり乍ら活動を失なふ、之を死といふのである。唯物論者以て如何となす。

又唯物論者の云ふが如く、肉體の外に別に精神なるものなきもの
のとせば、二育の必要は無き筈である。二育とは、身心の二育
にして、智育德育は心の教育にして、體育は云はずも知れた身
育である。是れ所謂學校に於て最も重要とする所でありませう。
爾るに肉體より別に精神なるもの無きとせば、體育のみをして
身體をさへ強壯に發達せしむれば、智徳も自ら發達して、作用
を現すべき筈である。體育を最重する力士、即ち常陸山や梅ヶ谷
は、以て大臣とすべく、以て元帥とすべき智徳の具はるべき筈
である。爾に事實は是の如くならずして、智徳即ち精神の作用は
肉體の外なればこそ、窮屈な理學や面倒ながらも德育をして、
精神の發達と修養を計らねばならぬのである。又唯物論者の
説の如くなれば、肉體の強弱大小醜美盛衰は、精神の強弱、大

小醜美盛衰と正比例にゆくべき筈にして、肉體の強き人は精神
力も強く、肉體の弱き人は精神力も弱かるべき理であるのに、
世人の實際は決してソイでなひ。肉體は至極強壯にして、精神
は至極遲鈍なるものあり、又肉體は虚弱なれども精神は銳利な
るものあり。世の諺にも阿房息災、才子多病といふに非ずや、
又肉體大にして精神力小なるものあり、肉體小にして精神力大
なるものあり。所謂獨活の大木トやと世間から笑はれ「大男總
身に智慧が回はり兼ね」と歌はれたりする奴もあれば、小さく
ても針は吞めぬ、山椒は小粒でもピリ、と辛ひと云はるゝ者も
ある。

古の豊太閤や、ナポレオンは、身長僅に四尺八寸といふ小男で
有つた、爾るに古今無双の大業をなせしに非ずや。又魯國のマ

チノ一といふ人は、二十三歳にして身長九尺三寸、世界無双の大男トヤ。爾に心は魯國の魯の字の方と見へて、見せ物となりてその當時、英京ロンドンあたりを連れ回はられしに非ずや。又唯物論者の如くなれば、肉體美なるものは精神も美にして、肉體醜なれば精神も醜なるべき筈なるに、世には肉體は非常に醜なれども、精神は至て美なるものがある。即ち齊の閔王の愛せられし宿瘤の如きが是れである。又肉體は至極美なれども、精神は頗る醜惡なるものがある、所謂外面女菩薩内心如夜叉とは是れである。爾れば精神と肉體とは別であるといふことは明かである。又唯物論者が云ふ如くなれば、身體の盛なるときは、精神力も盛にして、身體衰ふるときは、精神力も衰ふべき筈であるに、世人の實際は決してソイでなひ。孔子は十五にして學に志

し、三十にして立ち、四十にして不惑、五十にして天命を知り六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する所にいたがへども矩をこへずと自ら云はれた。孔子も身體の方は、三十を壯と云ひ四十は初老とし、五十は中老、六十は大老といふ様に、四十初老後は追々老衰せられたのトヤ。爾に精神は是れと反比例にして、漸々に四十よりは五十、五十よりは六十、六十よりは七十と發達老練せられたと見へる。是れ精神と肉體とは別なる明證ではありませんか。かく一々列擧して論ト去り、辯ト來りて見れば、かの精神力は肉體上の作用なりと云ふて居る唯物論者は大々的の迷執にして、眞理に背反して居るといふことは、瞭々火を見るよりは明かなること御座りませう。爾は其の精神即靈魂なるものは、滅するものか、滅せざるものかといふに、決

して滅するものではない。其の理證は、抑々無より有を生ぜず有は無に歸せずといふこと、又原因結果の理法は、宇宙天然の原則である、眞理である。此事は宗教家は無論、法學理學文學醫學工學農學の各學士博士も共許といふて、共に承諾信許する説であらう。科學者は物質無盡、勢力恒存、原因結果を三大原則として、萬有無に歸せずといふでせう。之を我が佛敎上より申せば、三世實有、法體恒有とか、世間相常住不増不減といふのである。果して無より有を生ぜず、有は無に歸せずといふことは、天地萬有實檢上に、誰人もよく分ることである。近く申せば、此のコップの中に在る水を、鐵瓶に入れ、下より熱火を以て煮るときは、遂に鐵瓶中の水は枯渴して、一滴も無くなる。無くなるといふたとて、決して無に歸したのではない

コップ中の水の驗

水其物の増減不減

蒸發して空中に飛散したのとや。空中に飛散して無に歸するかと云へば、ソーでなひ、天に昇りて浮雲となるのとや、浮雲となりて無に歸するか。ソーでなひ雨雪霰となりて地上に下り井中や河海の水となる。其の水を汲取り、水瓶に入れ、コップの中に注げば、又コップ中の水となる、それを私がコー呑めばコップ中の水は無くなるが、私の腹中の水となる。腹中で無くなるか、否、汗や尿となりて、復體外に排泄する、體外に排泄せば再び水となり、浮氣體となり、雲となり雨となり等、千變萬化、姿は轉變すれども、水其の物の體は、一滴たも無に歸するものではない、そこで古往今來不増不減トや。又此の水を化學的に分折すれば、水素と酸素とに歸して、水の相は無くなれども、實體は無くなるものではない、其の水素と酸素と再び化

○靈魂不滅の確證

合せば、もとの水となるのである。是は只水斗りではなひ、天地萬物皆是の如きものにして、有なるものは無に歸せぬのである。實に有は無に歸せぬのは、宇宙の眞理である。有は無に歸せぬのが宇宙の一大眞理として見れば、吾人の靈魂なるものも滅して無に歸するものでは決して有りません。何となれば、現在吾人には靈魂なるものありて、思慮覺知の作用をなすつゝあるではありませんか、現在諸君一同に思慮覺知の作用をなすつゝある靈魂が有るなれば、決して無に歸することはありません天地萬有は無に歸せざれども、靈魂のみは無に歸するといふ事は不條理の論であります。爾は體と魂と分れしときは、善惡の因業力に牽引せられて、苦樂の果報を感じ、六道を輪廻したり又は四聖の果を得て悟樂の境にも遊ぶことを得ると説き給ひし

佛陀の教訓こそ、實に仰で信奉すべき眞教ではありませんか(然り) 己に然りくと御了解が参りましたならば、何卒進で彌陀の本願を信し、安養に至て妙果を證するの身となられんことを。先今席は是れにて終り、次席には原因結果の原則に依て更に靈魂不滅を證明致しますから、萬望誘引と合せて參聽あらむことを。

靈魂不滅の確證 (其三)

エー最早殘暑の候には押移りましたが、猶炎熱燬くが如き日中をも御厭ひなく、賑々敷來聽なした下され、迂衲も心中躍々然として、此演壇に出席しました。實に所聞者の諸君の熱心は、能者説の迂衲の心想を動かして、今日は苦熱を顧みず、一層の大

○靈魂不滅の確證

熱心を以て演述致さんとする胸算でムります。ドーか是れから迂衲が演述に及びまする、靈魂不滅の理證論は、化して清涼風と爲り、火車上に在るが如き、此の苦熱を變トて、極樂池中七寶の臺に遊ぶが如き、思ひあらしめらるゝやう致したきが、迂衲が私に希ふ所です。

却説靈魂不滅の確證に付、第一回には言證を挙げ、第二回には理證を擧る中に、科學の原理として、社會の學者も宗教家も、共許する所の、無より有を生せず、有は無に歸せずといふ、宇宙の眞理を保證として、以て靈魂の不滅を辯明致したことでムりまするが。今席は、一層進んで矢張り學者も宗教家も共許するところの、原因結果といふ理法を以て、靈魂の不滅を證明する積りです。

原因結果
不滅靈魂

原因結果
の理法

英語で申せば、コース、アンド、エフェクト、此に譯して「原因結果」佛敎に所謂「因果應報」俗に云ふところの蒔かぬ種は生へぬ、飲た酒なら酔はねばならぬ、酔ふた酒なら醒めねばならぬ、蒔た種なら生へねばならぬ、生へて來たのは種がある。善因には樂果、惡因には苦果を生ずるといふことは、天地自然の原則、宇宙公道の眞理にして、佛天人の所作に非ることは。今更迂衲が喋々を要せず、如何なる人々も之れを否認することの出來ない、横に十方の空間的に遍く、豎に三世の時間的に徹して動かす可らざる、一大理法でムります。既に原因結果は、横遍豎徹の一大眞理として見れば、吾人が靈魂の不滅は、無論のこととあります。何となれば、若し靈魂の不滅が立たざれば原因結果の理法も立ちませぬ、原因結果の理法が、天則の眞理

○靈魂不滅の確證

として立つかぎりには、靈魂の不滅は、此の理法が淨玻璃鏡と爲つて證明して居るのである。

之れに就いて去る明治三十年、迂衲が東京に駐在布教使として出張し居る時、法科大学生某氏、外三名と共に、迂衲が寓宅に來訪せられ、談偶々宗教に及びし時。某氏云はるゝには、予は腹藏なく申せば、宗教なるものは全然無用の長物と見て居るのである。其故は現社會は、法律と道徳と輿論との三制裁力を以て維持すれば、早や十分である、殊更宗教の力を藉つて、世の治安を計るの必要はないのである。又宗教家は後生靈魂の歸着に付いて信仰を勸むれども、是れ亦不必要のことである。人は原素の化合上に成立て居るものにして、死せば其の原素に復歸する迄にして、靈魂なるものが死後轉生する抔云ふことは決して

て無きことである。爾れば來世に付ても不必要、現世に於ても無用の長物である、其の無用の長物たる宗教に、寄生虫と爲て美食安座して居る宗教家こそ、實に社會の穀潰たる害虫である速に驅除して仕舞ひたいと思つて居るが、予の平素懷抱して居る意見である。併し御妙説もあらば承はり度いと思つて、今日ハ態々推參致しませしたとの事有つた。そこで迂衲は徐に口を開きませした、古來佛法の佛の一字の意味も知らず、所謂食はず嫌ひの輩が君の如き言をなすもの多々あることであります。君は法科大学生と名刺に肩書がしてある故、君が平素研究せられつゝある法律學と、佛敎の法理とを、比較對照して御咄し申せば、定めて君も御了解し易からんと思ふ。君が研究せられつゝある法律なるものは、原因結果を天則の眞理として、之れを基

礎と据へてあるでせう。又法律の目的は、無法律に在りといふが、御定りでせう、今其の法律の目的に付いて、宗教の現世に必要にして、而も法律の目的を達せしむる功力あるものは、宗教であることを説明し。又法律の基礎に付いて、靈魂は不滅にして、來世の必要なることを證明しませう。

抑々法律の基礎とするところの原因結果は、宇宙の公道、天地の眞理にして、甲に私し、乙に偏するといふが如きものではありませう。爾るに人爲の法律としては、爰に甲乙二人の殺人犯者ありと假定せんに、甲助は百人を謀殺せし罪人なり、乙造は一人を謀殺せし罪人なり、之れが法廷に於て何れも犯罪の證據十分擧りたるとき。假に君が判事として之れが宣告をなすときは、如何に判決せらるゝや、甲助も乙造も、絞罪を申付く

甲乙二人
犯罪の驗

るのでありませう。それでは甚た偏頗の處置ではありませんか一人を謀殺せしものが、一度の絞罪にて假りに罪を全償するとしたときには、百人を謀殺せしものは、百度絞罪に處せねば、罪の全償は出來ぬのが道理である。爾るに一人をして、百度の絞罪にして百人を殺せし罪を全償せしむるは、現社會に於ける人爲の法律としては、萬々不可能のことであるから、止を得ず一人を謀殺せしものと同一の處分をするのである。さうすると法律上にては、一人を謀殺せしものが一度の絞罪にて、罪を全償せるものと假定せば、百人を謀殺せし者を一度の絞罪のみにては、漸く一人を殺せし罪を全償せし迄にして、また九十九人を謀殺せし罪は全然残りてある。原因結果は天則の眞理にして、蒔いた種なら必ず生へるものならば、其の九十九人を殺せし殘

原因結果
は天則

罪は、何れにて結果を生ずるや。君が云はるゝ如く、人は十四原素に復歸して來世はなきものとせば、其の九十九人を殺せし殘罪は、結果なくして消滅して仕舞ふのであるか、それでは原因結果の理法は虚妄法となる。原因結果の理法が虚妄なれば、法律の基礎は虚妄を以て基礎として居るのであるか、否原因結果は天則の眞理にして、法律の基礎は虚妄ではない、蒔いた種なら必ず生へるものなれば、前陳の九十九人を殺せし殘罪はどにかいて、必ず償却せねばならぬでせう。爰迄申せば早や餘り多辯を要せずとも、來世は無ければならぬ、靈魂は不滅であるわい、不滅の靈魂が、其の責を受けねばならぬのであるといふことは、承諾せざるを得ざる理法でありませう、君は如何に思はるゝやと推問せしに。某君はいかにも御有理のことぞりま

すと云つて、廓然大悟せられました。

更に一步を進めて申せば、世の中には其の實、大に犯罪し乍ら巧みに法網を潜り、生涯何食はぬ面して居るものが澤山に有であらうと思ふ、此の隱匿の罪は、法律を以て罰することは不能である。爾れば何れにて此の原因は結果を生ずるのであるか是れ亦來世の結果なかる可らず、責を負ふ靈魂は、不滅のものならざる可らざる明證でせう。全體世の中には一生善をなすつ善果なき者あり、大に惡を爲しつゝ、惡果なき者もある。彼の盜跖は生涯大盜賊をなす乍ら、安樂に長壽を保つたことである、伯夷叔齊は、忠孝者にして、首陽山に餓死し、亞聖と云はれし徳行家の顔回は、不幸短命にして死す、仍て司馬遷は、天道是か非か、吾れ是に於いて焉れを惑ふと痛歎したの、分り

易く云へば、天道さんも聞へませぬと泣いたのトや。人は現在一世にして過去も來世もなきものとせば、かゝる痛歎の語を發するもの、實に尤である。善人は善の仕損、惡人は惡の仕得といふやうなことになる、それでは世の中は無茶苦茶と爲つて仕舞ふ。爾るに之を明に佛教の三世因果の理法より見るときは、盜跖は今世は惡を爲したれども、前世の善因にて安樂長壽を保つ、なれども今世の惡因は後生に感トて、必ず惡果に苦むのである。伯夷叔齊や顔回は、今世は善をなす乍ら、前生の惡因に依て不幸短命なりとも、來世は今世の善因により、善果を得て幸福である、かく判斷して見れば、天を怨むること何にもない自業自得果と諦らめて、益々善道に進む氣になるのである。又手又人の惡事をなすや必ず五段の階級を経るのが通常である

惡事の五階級

一に發意、二に思念、三に決着、四に豫備、五に着手。第一の發意にて、ポット己れ憎ひ奴トや、殺してやらんと意中に發動する、ソ一して第二に、どうせうこうせうと思念する、ソ一して第三念にいよく殺さうと決着する、ソ一して第四に豫備と殺害の用意に、刀を磨く、ソ一して第五にいよく着手と、手を着て殺人するのである。爾るに法律としては、第五の着手せしことが露顯せざれば、之れを處分することは叶はぬのである。汝は意中に彼の人を殺害せんと思念して居る、汝の意は己に殺人罪を犯して居る、故に捕縛して入監せしむるといふ譯にはゆかぬ。去り乍ら法律の精神より云へば、早や意中に殺害せんといふ思の發りしよりが罪惡である、否罪惡の根本であるといふことは、十分認めて居るのである。そこで法律には、精神は犯

罪の主體なりというて、罪惡を犯す主人公となり、本體となるものは、決して形體土の手や口等に非ずして、無形の精神に在ることは無論である。意識あるが故に罪惡があるのである、無意識なれば罪はなひのである。故へに殺人犯にしても、罪に三等を分つてせう、即ち謀殺、故殺、誤殺である。人命を取ら形跡上から申せば、害は同一なれども、罪は精神に在るもの故に、謀殺は第一等の重罪にして、故殺は其次、誤殺は其の次と、情狀酌量して罪何等を減ずるといふことがある。是れ法律に於ても、罪は精神に在るといふことを認めて居るからのことである。爾れども精神内に在つてなす罪惡をば、之れを處分することの叶はぬのが、人爲の法律である。されば其の精神の罪惡は、何れにて處罰を受く可きや、必ず不滅の精神が其の責を負うて、

來世に苦果を感じて、三惡道に呻吟するに至るといふことは、否認す可らざる道理であります。實に吾人が精神上の罪惡を、因果の眞理たる淨玻璃鏡にかけて檢視したならば、恐ろしき罪業であらう、精神にては親を殺す子もある、夫を殺す妻もある、他妻を姦する不義者もある、一々算し來らば、人々の精神は罪惡をいつかり貯蓄せる倉庫である之れを償却するには、三惡道がある、不滅の靈魂が來世に輪廻して苦惱を受くるのである。諸君は御了解が出来ましたか、已上の説明を聞いて、大學生は大に感悟せられ、實に受生の初事に、靈魂は不滅である、來世は必有るものであるといふ思想を腦天に浮べさせて貰ひました、是れ偏へに貴師の御説明の御蔭で与ります。是れより後は、私も進んで佛教の門に入り、不滅

の靈魂を修養し、安心を獲得し、現當二世の大幸福を全したく
 存トますれば、將來宜敷御引立を願ひます、今日は黄昏になり
 ましたから、之れにて失禮致しますと、躍然と辭し去られ。其
 後は日曜日毎に不欠に迂衲の寓宅に参ひられ、喜んで佛法の眞
 味を聞かれました。エー今日はあまりの暑さに苦み、心も亂散勝
 ちにて、言陳も前後錯雜して、諸君は聞き苦しくムりましたで
 せうが、どうか御了解に参り兼ねる點もムりましたらば、御遠
 慮なく御尋ねに預りたひことでムります。先は靈魂不滅の理證
 論は之れにて終結とし。次回にはいよいよ實證を擧げて辯明致
 しますから、何卒參聽あらんことを切望致します。

靈魂不滅の確證 (其四)

又手靈魂不滅の確證に付、第一回は言證を擧げ、第二回は
 理證即ち有は無に歸せずといふ、科學の原則、第三回は原因
 結果といふ天地の眞理とを以て、靈魂の不滅を證明して置さま
 した。今席は百尺竿頭一步を進めて、第四に靈魂は不滅なる
 ものであるといふ實證をのべて、この演題の終を告げる積りで
 あります、暫時靜聽あらんことを希望致します。

抑々靈魂は不滅なるものである實證、即ち事實の確證は、眞宗
 の寺の本堂に参拜して見れば、大抵どの寺にても七體懸て居ら
 れます。第一中央に立ち給ふ阿彌陀如來が、五兆の願行に報ふ
 て無量壽の覺體と成らせられ、一切衆生をして無量壽の大果報
 を得しめ給ふも、また釋迦牟尼佛と示して、八千度もこの界に
 現はれ下されたも、靈魂が不滅であるからこそ、かゝる活動を

なして下さるのである。又印度の王舎大城の頻婆沙羅王、儲君な
 きことを悲み相者に相談し給へば、是より三里の奥山に仙人有
 り、今より三年せば死してあなたの御子に生れられますと申上
 り、今より三年は待遠ひとて使者を遣はし之を殺害せしかば
 果して韋提希夫人懐妊の身となられた。爾るに相者之を知りて
 申上るには、是は甚た惡き事をなされました、宿因其期をまた
 ずして、仙人殺害の報ひには、今度の御子は生長の後には、あ
 なたを殺害せられますと。王は之を聞き、そるか、予が子が欲
 ひといふも、老後のすがり柱と思へばこそとや、それに殺害せ
 られては大變だ、そんな子なれば早く殺して仕舞ふに限るとて
 出産の際、二階の天井に穴をあけ下に劍を横たへ、二階の穴よ
 り下に横たへてある、劍の上のうみ落ちて殺さんとせられしに

阿闍世太
 子と韋提
 希夫人

其の御子は劍のさきにて、僅に手の指を一本きられしのみにて
 オギヤア〜と泣てゑるを見れば可愛くなり、御養育に相成
 たが阿闍世太子とや。

隔生即忘のならひとて、阿闍世太子は何にも知らずと、兩親に
 孝養なされて有たが。世にも名高き惡逆の提婆達多が、我は釋
 迦を殺して、佛と世より尊敬を受ける身と爲てやらう。付ては
 阿闍世に因縁を聞かせ、頻婆沙羅王を殺さしめて、あれを王と
 してやらう。そうして我と阿闍世と心を協せば、天下は自由自
 在とや。オーストとや、事は急げとやとて、有日提婆は神通力
 にて空を飛び、阿闍世太子の所に参り。太子の手の指一本切れ
 てあるを證據に、彼尊の前生仙人たりし身を、三年の壽命をま
 たずして、無理に殺害せられしことから、指一本落された因縁

を一伍一什を告げしかば。果して阿闍世は瞋怒して、頻婆沙羅王を七重の牢獄に閉込めて、はら殺にせらるゝ事に成た。こゝを祖師の御和讃には「頻婆沙羅王勅せしめ、宿因その期をまたずして、仙人殺害のむくひには、七重の室にとぢられき」と御示なされた。

ところが韋提希夫人は、私に通ひて麩蜜を供してゐるといふ事を、門番から聞かれて又立腹して。我母は是賊トやと云うて、遂には母君の韋提希をも、七重の牢獄に押込めて、はら殺にせらるゝことに爲た。(實に大悲劇である)そこで韋提希夫人は現在に産で育てた吾が子の爲に、はら殺にせらるゝとは、思へばくなきけな、この世からなる地獄トや、況や後生も眞闇がりトや。仰ぎ願くは大聖釋迦如來、彼尊と申せば勿體ない

御弟子を一人遣り下され、後生の助かる道を教へて下さひと心願し給へば、釋迦如來はそのとき靈鷲山にて、法華經を説ひてムつたが、ナヤンと其心願を知り召し給ひ。我が出世の本懐たる、彌陀本願の正客が現れたとて、暫く法華經を中休みなされ阿難目蓮をめぐつれ給ひ、虚空を飛で韋提の牢獄に御下りなされて、御懇ろに御説きなされたが、淨土の三部妙典の其の一なる、觀無量壽經トや。釋迦如來は韋提の爲に「除苦惱法」と云うて、苦惱を除く法を説くぞよと宣へば「應聲即現」と、其の聲に應じて「住立空中」と現はれ給ひしが、拜む大悲のあの親様トや。そこで韋提希夫人は、あの御姿を拜まるとなり、信喜悟の三忍を得て、芽出度往生を遂げられたのトや。サア皆様はこの話一つ聞ひても、いかにも靈魂は不滅なるものであると

いふことは、因果應報のおそろしきこと、釋迦彌陀二尊は、慈悲の父母でましますといふことを、併せて了解せられたでありませう。もし靈魂が滅するものなれば、殺された仙人が阿闍世と生れ来る筈はなひ。

第二には中尊様の右と左にかゝつてゐる、祖師聖人と中興上人の御二方トや。祖師見眞大師は御臨末に、下間蓮位に向はせられ、我れ二百年もたらば再びこの土に來て、一宗を引興さねばならぬと仰せられしが、果して蓮如上人御誕生の朝、下間法橋の枕頭に祖師聖人立せ給ひ。是れ下間よあまりも衆生が可愛さに、また來たくと御告なされたとある。これも靈魂が不滅なるものなればこそ、かくも御再來なして下さることが相叶ふたのトや。

第三には七高僧では、五番目にゐる善導大師のことを、祖師の御和讃には「世々に善導いでたまひ、法照少康と認めつつ、功德藏をひらきてぞ、諸佛の本意とけ給ふ」とある。御一人の身として善導トやの、法照トやの少康トやの名をかへて、度々御出まじ下されたも、是れ靈魂が不滅なる故である。

第四には七高僧の六番目にゐる源信和尚は「靈山聽衆とおはしける、源信僧都のをへには」と祖師も讚述あらせられて、釋迦如來の御在世には、靈鷲山にて説法聽聞なされたとある、是亦魂の不死の證據である。

第五には七高僧の七番目にゐる法然聖人トや。是も御和讃に「源空自らのたまはく、靈山會上にありしとき、聲聞僧にまとはりて、頭陀を行じて化度せむ」とある、いよく以て魂の不滅

聖徳太子
の前生

なることは明かませう。

第六には餘間に御かゝりなされてある、聖徳太子様ぢや。あの御方の前生は支那の衡州南岳の惠思禪師と申して、まことに深智碩徳の高僧でありました。達磨大師の勧めに依て、一千數百年の昔、この日本へ降誕まゝして、守屋の大臣が佛法に反對せる邪見者であるから、之を降伏して日本の佛法の基ひを開いて下された御方である。依て有時妹子の大臣を遣唐使として、かの衡山へ前生御所持の經典を取りに遣されたこともある。又今、日本國中誰れ知らぬものなき、京都三條六角堂の觀音様は、即ち太子様の前生よりの御念持佛であらせらるゝ。この六角堂の觀音様の御告により、祖師聖人は念佛の門に入り給ひ、また肉食妻帯の宗風も御開きなされたことは、皆様もよく御承知の

聖徳太子
尊像の談

ことトや。そこで祖師聖人は、聖徳奉讚十一首迄御作りなされて、御讚述なされたその中に「大慈救世聖徳皇、父のごとくに
おはします、大悲救世觀世音、母のごとくにおはします」と御恩を御喜ひあらせられた。故に眞宗には特に聖徳太子の尊像をあの通り奉安して、供養恭敬を申上ることに爲てあるのトや。かの尊像の上には、いかなることが書ひてありますか、文字のよめる御方は、拜讀して御覽なさい。「吾利生の爲に彼の衡山を出て此の日域に入り、守屋の邪見を降伏して、終に佛法の威徳を顯はす」と、あなたの御自言が書いてあります。サアこゝ迄具體的に、而も皆様が眼前に拜見してゐる御姿に付て御話申したらば、いかなる人々も靈魂は不滅であるといふことは、實に明々白白として日を見るよりもあきらかに、御分りに爲たであ

りませう。(ヒヤ〜)

すでにたましひは死なぬものと云ふことが明かに爲て見れば、吾人の來世はさうなるか、やはり聖徳太子の如く、人から人に再び來らるか、そこは種のみさま様トや。五戒の因なら人に來る、十善なら天上界、六字を頂けば極樂、五逆五障等なれば地獄じや。諸君よ諸君、さうかこの不滅の靈魂を地獄の火中に落さぬ様、極樂池中七寶の臺に上らるゝ様、切に〜希望致します、先は是にてさようなら。(おはり)

三世因果 (其一)

此度諸君の御清聴を煩します演題は、右に掲たる三世因果なる論題であります。三世因果といふことは佛者の常談にして、諸

實あるに價
すは永續

君は珍しくもない古るめかしいと思召すであります。私はその珍くない古るめかしいところが、三世因果の價値のある所だと思ひます。何せとなれば、諸君世間上でも考へて御覽、只一時珍しがられて、其の時限りで古るめかしい傳はらないものは、何物に限らず、實地の價値の無いものに限ります。又珍らしくはなくとも、古るめかしい傳て居るものは、さうでも其れ丈實地の直打があるからでせう。可笑例であります。彼の芝居を御覽なさい、當時流行の新聞芝居たの、いや壯士演劇たのと、出掛けますと、奇を好むの人情より、一時珍しがられて、大層繁昌しそりにムリますが、情けないかな、さうも長續がらないやうです。又忠臣藏たの、妹背山た杯と申すと、誠に古るめかしい、芝居見物する程の者が、忠臣藏や、妹背山を知らな

いものは無ひと云ふ位、常に演ずる芝居にて、珍らしくもないのに、誠に古るめかしう、傳はりて居りますは、之れが當時の新聞芝居杯よりは、さうでも脚本の組織趣向に、直打の勝れた所があるからでせう。今三世因果の論は、芝居で云へば忠臣蔵の藝題を見たりやうに、珍らしい題では有りませぬが、三千年來佛者の常談として、古るめかしう傳りまじたが、即ち豎徹三世の眞理たる價值のある證據でムります。原來佛教は、三世因果の理法を基礎として、成立たるものなるが故に、苟も佛教の流を汲むの徒は、細々に溝を浚へて、法水を心田に流し込むべきことが必要であります。

世界の宗
教を三類
に分つ

古今萬國にも盛衰起滅せる宗教は、實に種々無量に分れてムります。或統計家が當今の世界に流布せる宗教が、凡そ一千有

現在一世
教

餘程あると申しました。其の一千有餘派もムります許多の宗教を、總概て之を分別致しますと、一世教、二世教、三世教の三類の外には出まいと考へます。其の一世教とは現在一世の事のみを教へて、過去世や、未來世のことは云はぬ教であります。是れが即天竺の斷見外道、及支那の儒教（且く儒教を宗教の部に攝して云）の如き類であります。尤同ト一世教でも斷見論と儒教とは内譯して見れば、大に異なる點がムります。斷見宗は一名無見外道と申して、斷トて過古世も未來世も無ひ、只現在一世、天地間に忽然として生れ、又忽然として死るので。恰も彼の松茸杯が秋分の氣候に化かされて種蒔もせざるに、忽然として生ト、又朽ては本の地や水になつて仕舞が如く。天地の氣に化せられて、四大假和合して、且く人間と生れ來りたれど、死

せば又本の地水火風に歸して仕舞ふから、更に魂魄がありて、
 未來へ往くの何のといふことではない、たから未來の用意に佛敎
 を聞く抔とは無用の徒勞である。若し此の消へて失せる人に、
 強て佛敎を聞かすと云ふことなら、松茸にも佛法を聞かすがよ
 いと云ふやうな、極々理不盡なる外道法であります。故に龍樹
 菩薩に、程能く摧破せられたのであります。又手又儒敎では六
 合の外、存して説かずとか、未だ生を知らず安ぞ能く死を知ら
 んや抔と申しまして、過去世や未來のことは、有とも無とも明
 確に云はずして、只現在一世の倫常の人道を教るを以て急務と
 する方である。(最も漢已後の腐儒敎者輩が佛敎に敵せんとて、
 魂滅を談する邊は、斷見外道と同一なるべけれども、是れ恐く
 は、孔子の本意ではありませんまい、此に付ては儒佛の關係と云

ふやうな題を設て、他日更に御咄致しませう) 兎に角是等が一
 世敎と稱する部類のものである。次に二世敎とは、大自在天外
 道、及基督教の如きものであります。是等の敎は造化の神を立
 てますから、前世は語りませぬ、只今世と未來世の二世をのみ
 教ふる法でありますから、名けて二世敎と申すのである。
 扱三世敎と申しますは、之れにも凡二類が分れまして、常見の
 三世と、佛敎の三世であります。常見の三世と申すは、天竺の
 常見外道、一名有見宗と申して、過、現、未の三世あることを
 談しますが、瓜の蔓には瓜が果る、茄子の莖に黃瓜はならぬ、
 人が死たら人に生る、畜生から人に轉生するの、人が地獄に墮
 すると云ふ如き、無條理のことはない、人間はいつくまでも
 人間界に生れ代り、死に代り、三世を経るものと云ひます。

今佛敎の三世は過現未と隔生する上に、因果の連鎖を掛けて参りますから、善因善果惡因惡果の道理に引かれて、六度及十善五戒の善因を蒔けば、佛界乃至人天に生じ、三毒五欲の惡因を蒔けば、三途に墮落すると教へますのである。就きまして、一世敎、二世敎、及び三世敎中、常見論の不條理なる點を一々辨駁を加へ、而して佛敎の三世因果は、圓滿完備なる眞宗教たることを論辨致ますれば、誠に鮮かに諸君の御了解に至るべく、まじやうが。併しそうしますと中々駁邪斗りにも多くの時間を取られますから、今日は駁邪の方は存略にして、顯正の邊より辨ずることゝせませう。併し顯正即破邪ですから、三世因果の佛敎が眞理たることが顯はるれば、他は皆非眞理の説たと云ふては、自ら反顯して御分りになる道理であります。さて佛敎の三

世因果に付きまして、巨細に之れを論せんとすれば、或は四種の三世と云ふことを分て論ずる説もありますが、あまりやゝこしくなりますから、今は之れを省略して、二種の三世と分て、御咄に及びませう。其の二種の三世と申しまするは、いかゞなものであるかと云へば、一には小の三世因果、二には大の三世因果であります。

三世因果 (其二)

抑々三世因果は、ナチユールロー即天然の法則、自爾の眞理にして、事々物々此の理法を逃るゝことは、ドーしても出来な。たとひ、佛敎は嫌らいでも、三世因果の道理の外に身を處することは、出来ないのであるから、無宗教者も、外教徒も

三世因果の法則天然

能く此の理法は研究しなければならぬ。全體三世因果の眞味を知らない人々は、三世因果と云へば何たか釋迦佛の、捏造説と云て（丁度かの耶蘇教に云ふ、ゴットの天神が土を捏ねて、アダムの體を造り、氣を吹込み、其の魂となし、尙アダム一人にては淋しからんとて、アダムの筋骨を引抜て、エバと云ふ女を造りたと云ふが如く）、釋尊の手拵へにて、三千年昔に始りたことこのやうに、誤想せることであるが、決してそうではない。これは前にも申す如く、天然の法則、自然の眞理であるから、之れを空間的より云へば無限無際、之れを時間的より云へば無始無終に存在してある眞理を、釋尊發見して、或は現世一世の事のみ迷ひ、或は二世教、或は常見の三世教等に、迷うて居る輩に教へて、轉迷開悟せしめ給ふ迄のことである。

之を例して申せば、亞米利加と云ふ國は、四百年前にコロンバスが發見してから、始めて世に知られた國であるが、之れもコロンバスが（日本神代卷に云ふ、諸冊尊の滄溟を探り給ふ銚滴より、オノコロ島を造たと云ふ如く）手拵へに造出したと云ふ譯ではない、唯發見した迄である。又フランクリンがエレキの事を發明してより、當今の電信機も、電氣燈も、出來たものであるが、之れもフランクリンがエレキを捏造したのではない。佛敎は只に三世因果のこのみならず、千百の法理悉く自然の眞理に基いて教へ給ふものである故に、天然の眞理が滅却せざる限りは、佛敎の滅亡する恐れはなきことである。有人が私に、佛敎の眞理なるものは、如何なるものでムリますかと尋ねました故、私は佛敎の眞理と云ては、其の言穩當ならぬ、眞理の佛

教と云うて然る可きである。彼の一休禪師が「釋迦と云ふ、たはけ坊主が世に出で、多くの人を迷はするかな」とよまれたも、何にもあれは釋尊を指して、直にたはけ坊主と、暴言と給ひたるにはあらで。佛教の眞理と云へば、何にか釋迦の手拵への如く、心得惑へるたはけ坊主が出て来て、多くの世人を迷はするは悲ひ哉と、末弟の誤を、悲歎したまふたころである、申したことがふります。諸君先此の點に注意して、而して後述の説明を靜聽せられよ。

小の三世

扱是より、正く小の三世因果、大の三世因果と云ふことに押移て、御咄を致します。小の三世因果とは、即現在一世間上の小局部に付て、三世因果の有様を辨するのである。大の三世因果とは遙かに、生前死後の大區域に涉りて三世因果の状態を明かす

のである。其の現在一世間上の小局部に付ても、亦幾部分も分れてまいる。極々小分に付て申せば、一秒間一分間一時間の上にも、三世因果の理は苟も離るゝことはありませぬ。即只今は午後三時であるが、此の三時の現在時に於て、諸君が演説を傍聽せらるゝ、結果が現れたのは、是れ二時の過去に於て、諸君が出難き五欲の我家を立出で、參詣せられた原因があるからです。又此の演説を靜聽せられて、四時の未來には、諸君は歸宅せられて、今日はかくかくの演説で、面白かつたとか、有益であつたとか、一家團欒して御話の出る、果が顯はれてまゐります。又一日の間に付て申せば、昨日牛飲馬食に財を散ら、家業に怠たりと惡因あれば、今日は宿醉に身體を苦しめ、散財して懷ろ淋しく、家業に追はれて心を悩ますの、惡結果が現れて

まゐる。又今日夙に起き、夜半に臥し、家業に勉強して置けば
明日はまことに快ひ善果が顯はれてまゐる。一月半季一年の上
に於ても、皆爾りである。

尙一層進で人間一生涯に掛けて申せば、若年の時に放蕩無頼に
して學も修めず、家事も營まらず懶惰にして、驕奢に耽り居ると
老後に及で必ずや、衣食住に困窮を來たし、襤褸を纏うて、路
頭に彷徨せねばならぬ、慘な境に陥ります。之に付て大因小果
小因大果と云ふことあり、若き時に果報は寝て待て牡丹餅棚から
と、浮世三分五厘と、いつも大の字なりに寝て居て、飽食暖
衣檢束する所なくば、必ずや老年に至り身上は小の字となり、
若い時は肩で風を切り、威張り居りしものも、老ひて歩行くに
息を切り、段々肩をすほめて、小さな蚊の鳴く様な聲をして、人

人間一生
の因果

相撲者の
風呂入の
験

の軒下に立ち、ドーゾ御残り物をと云て、吟行せねばならぬや
うになる。又若時に小の字になり善事は小と雖之を積み、悪事
は細と雖之を慎み、小金も浪費せず、以て追々に勉強して行け
ば、老後に至れば安樂自在の身となりて、大の字なりに寝て居
ても、何不足なく暮すことが出来る。

彼の相撲者が風呂に入たときの様に、世間は渡らねばならぬ、
凡ての人が入湯したときは、上より下に洗ふが常なれども、相
撲者に限て、足裏より脛に及び、それより脊腹手頸顔頂と、段
々上の上に洗ひ上ります。之れが相撲者の精神を表して、造
次にも顛沛にも、忘れぬ姿である。其はいかなる大關も、始よ
り大關たるものはあらず、初の程は番附にも、載せてもらはれ
ない、草履取や、提灯持を勤め、他の足下に踏付られて居ても

厭はず屈せず、努力勉強して、次第に昇進し、小結前頭關脇、遂に大關に迄昇達することが出来る。所謂登壇高自卑の精神である。只に相撲者のみならず、世は凡て此の如き精神になりて大因小果にならぬ様、小因大果になる様、世渡に用心致したきものである。

扱かく小三世因果の道理が納得せられなば、かの現世祈禱の八卦や占たの、日柄の吉凶たの、方角の開塞たの云ふ如き、條理もなき事柄に、血迷ふことは決して無きことになる。かの現世祈禱と云ふことは、何所にもよく行はるゝことであるが、元來三世因果の道理が分らぬからである。何となれば、三世因果の眞理が信せられたら、蒔かぬ種は生へぬ、禍福吉凶は、皆我が心身の業爲より現れ来るものであると云ふことが、チヤント

心底に納得が出来ませう。爾るに現世祈禱を致すのは、つまり蒔種せずに結果を得んとするのである。無理なる願望である。仍て現世祈禱をなす人には、佛も菩薩も後向である。何となれば、佛も因果の理を破らずとあるから、何程一念こめて日夜に祈禱しても、善因なきものに善果は與へられぬ。往昔有處に赤貧なる怠惰者あり、農業して鋤鋤持つも好らからず、商人となりて、帳面算盤かゝへるも面倒なり、大工や左官となりて、槌や鉋を持もいやなり、兎角寝て居て、樂に食はれる妙法はと神佛に祈禱して、幸福を授けて貰ふに限ると誤思案を定め。扱手思ふ様、諺にも箸と旦那は強ひが好ひと云ふ、祈る程ならしつかりした御方に限る、彼の不動尊は利劍を携へ、火焰中に嚴然として立ち給ふ、其の相最も勇壯活潑である。此

の御方こそ可ならめと、それより百日間、雨の降る日も風の吹く日も参り續けて、我を哀はれみ福を與へ給へと祈り、百日の満願日に至りし日、不動尊は一首の歌を以て「前の世に蒔たる種がなき故に、そちに與ふる福は無ひぞよ」と微妙なる御聲を張揚て告げ給へば。怠惰翁は、大に立腹して「前の世に蒔ひたる種があるならば、祈りやせんわい不動鼻たれ」と、いかにも失禮なる返歌をこつゝ、臀を捲り走り歸たと申すことである。此の話は一時の笑談に似たれども、又佛教の眞味、現世祈禱者の魂膽をよく穿てるの話である。

今年は何國も近年稀なる大旱魃に付、叶はぬ時の神頼みと出掛けて、彼村にも此里にも、雨乞々々と云て騒がしいことでありしが、これも入費損の草臥設たるつまらないことである。併し

現世祈の益なき例

こんなことを彼此申すと、此邊にも氣障になる御力があるからぬが、有ても仕方がない、つまらぬことはつまらぬと申さねばならぬ。元來よく考へて御覽、因なくして果のある道理はない、蒸發の因なければ、天上に雲と云ふ果は顯はれぬ。又雲の因がなければ、雨の果は降らぬ。爾るに蒸發や、雲の因もなきに、雨の果を降らして下さいと云ふは、洵に無理を云うて、神佛に強願すると云ものである。無理なるが故に、神佛も叶へて下さらぬ證據には御覽なさい、切に祈りし夏の頃は、一向に雨なくして、一滴の雨も必要を感じず、稻を刈干す頃には兎角雨天勝にて、農民は迷惑するでせう。まことに是等祈禱のつまらぬことは、論より證據分り切たことなり。諸君、今後は斷乎として現世祈りは、全廢して貰はねばならぬ。見眞大師は、和讃

に「佛號むねと修すれども、現世を祈る行者をば、之れも雑修と名けてぞ、千中無一とさらはるゝ」と屹度して御戒である、眞宗の門人に於ては、尙更らのことである。

三世因果 (其三)

又三世因果の理に達して見れば、八卦卜筮も入らぬことである。何となれば、抑々易の八卦なるものも、其實を研むれば三世因果の理を出ぬものである。そは易と申すにて明かである、易とは變易と熟する文字にて、苦樂福福の運命變易することは、善惡邪正の原因より來るものなることを、原理として、布演せしものに外ならざるものと考ふ。然れば八卦卜筮は、なしてもなさなくても、善因あるものは、福樂を得、惡因あるものは、禍

當るも八卦

苦に陥ることは、免る可らざる運命である。且今日の卜筮者は此等の眞理に達せずして、徒に筮竹を拈り書を披て、よい加減の出放題を云ふに過ぎざるものなれば、諺にも「當るも八卦當らぬも八卦」と云ひ。又「八卦八段嘘九段」と云ふに至れり、是只愚昧者を誑惑して、自分が糊口の資に供するに過ぎず。諸君血迷ふこと勿れ、若強て、卜占を欲せらるゝ輩は、私の許に御出なさい、私の易は、百發百中當らぬことは申しませぬ。勤儉なる人なれば、今日は貧窮に困るといへども、後來は應分に富樂の身上と變易し、奢侈怠惰の人なれば、今日は福樂の身なりとも、將來は次第々々に、貧困に苦しまん、勉強せば無智の輩も學者と變易し、不攝生なれば、強壯體も虛弱質と變易せん、此の理法を以て推すときは、百發百中と申すが、私の易である。

諸君、高祖は佛教徒が卜占祈禱をつとめとするをば、深く述懐和讃に悲歎し給うてあるから、眞宗信徒誤ること勿れ。

又日柄の吉凶たの、方角の開塞たのと申す様なることも、佛教徒たるものは係念すべきことでない。併し是は日本古來の惑にて、一朝一夕に其惑を解くことは容易に出来されども、全體一年三百六十五日、一日も休息なく御照なさるゝ日輪に、善惡がありてたまるものか、咎もない日輪に、罪を負はせて、黒日たの悪日たの、往亡日たの、ソリヤ嫁取は差支へるの、移轉はならぬのと、愚かなこと云も程がある。日柄に吉凶があるのではない、吉凶は人柄にあるのである。人々善惡の種蒔がしてある故、各々の業報の顯れである。其の證據には、都會の地にはよくあることだが、百圓の時計を落して、ア、今日は悪日たと悲

日は吉凶
りは人にあ

凶て戦争に
日の吉就

むものあれば、又一方には其の時計を拾うて、エー今日は吉日と喜ぶものがある。又嫁入と葬式と出逢ふこともいくらかもある嫁取の方には吉日た芽出度と祝ひ、葬式の家には親が死んだとか、大事を跡取息子が死去た、悪日たと哭て居る。

昔、唐の太宗出陣の時、有人諫めて申すには、今日は往亡日である、往て亡ると書た文字なれば、軍さ立には大悪日、御延引が然る可くと申上ければ。太宗の仰せに、それは出陣には大吉日、我往て敵亡ると云ふ事トヤとて、喜勇んで出陣せられたが果して軍に勝利を得て、唐の世二百八十年の基を起された。又これにやう似た話は、我日本にて慶長三年冬十月、石田三成、小西行长等が五畿西海北陸の兵を卒ゐて、亂を起せし時、徳川東照神君、自ら大將となり、關東の兵を卒て、美濃國關ヶ原へ

出陣の際、有人諫て申すには、今年は西が塞りて、方角を避けて出陣なくば、君の御運も塞らんを恐ると申上たれば。東照神君仰せらるゝには、西口今塞る故に我往て之を啓くなりて、眞西に向て出陣せられしかば、此亦勝利に成て、遂に舊幕府三百年の御代が續ひた。此通り唐の太宗、又東照神君の出陣なきは、天下の一大事人民の安危に關係する程の事てさへ、日の善惡にはよらぬ。況や田舎の嫁取や、轉宅位な事に、ソリヤ惡日たの、ソリヤ塞りたのと、穿鑿するは、實に愚昧な極と申さねばならぬ。依て當宗には此世の善惡は過去の約束にまかせ、未來の大事をば如來の願力にまかせ、心廣體胖かに日暮とせよが、眞俗二諦の御教である。扱是より進で大の三世因果を辯トませふ。

三世因果 (其四)

大の三世因果

前席は、小の三世因果に付て、喋々訥辯を振ひまらしたるが、今席は一步を進めて、大の三世因果を聊か辯解に及びまらやう。大の三世因果と申すは、遠く人界へ受生前の過古世より、遙かに死後轉生の未來世に及ぼして、因果感應の道理に纏縛せられて生死流轉輪回無究の模様を御話申すのである。扱此の大の三世の中に、現在世の有ることは、無論誰人も疑はぬことであるが過去世と未來世になると、障子一枚向ふの見ゆぬ凡夫の肉眼では徹観することはならぬ、一寸さきは闇の世で暮す我々の迷心では、到底推測することは出来ぬ故に。或は斷見外道の如く前世も來世もないものたと云ひ、或は常見外道の如く、人間は

幾度轉生しても、恒に人間たと云ひ、或は耶蘇教、神道、自在
 天外道の如く、神より造られたものたと云ひ、其の他種々なる
 想像を下して居ることである。今佛教にては、十界差別を立て
 、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上を、六凡の迷界とし。
 聲聞、緣覺、菩薩、佛陀を四聖の悟界とす。就中吾人は六凡の
 迷界中に浮沈して、種々なる妄想を起し、色々なる惡業を造り、
 蠶繭の自縛するが如く、蜘蛛の循環するが如く、生死輪轉の苦
 を受くるのであるから、前世もある、未來もあると申すのであ
 る。

然るに或書生が、私に尋たことがムリです。私は貴僧に御尋ね
 申たいことがあります、私は此頃心理學を研究して居ますが、
 心理學では、人には記性なる心の作用が有つて、前のことを能

く覺わて居る、それ故學事も出来るのたと申す。依て若し佛
 教に云ふが如く、前世が必ずあるならば、必ず記憶して居りそ
 うなものだ、然るに人多き中にも、前世の事を記憶して居るも
 のがあることは、未だ曾て聞たことも見たこともムリませぬ。
 爾れば前世はなきものやらんと、疑念が起りました、幸に御教
 示を賜はれと申ました故。私は乃で答へました、成程今日の心
 理學で記性と申しますは、我佛教にては、念の心所と申して
 あります、併し此心があるからと云うて、前のことをば、十百
 必ずしも記憶して居るとは申されぬ。君方が母の胎内に十月間
 宿りたることは、如何の模様でありたと云ふことを、記憶して
 居らるゝや、恐らくは記憶なきならん、豈只胎内のことのみな
 らんや、三四歳頃迄のことは、多分記憶して居なひものである。

已に人界内に受生れし、現在世のことですら、記憶すること能はざるに、況や遙に前世の事であるから、無論記憶は出来なひ筈である。之れが隔生即忘の凡夫のなさけなさである、けれどもこれは今日の凡夫に付て申すことである。古來更に前世のことを記憶せし者は、一人もないとは申されぬ、彼の晋の羊祜と申す人は、前世に所持せし金の指環を記憶して居たと申すことである。又我國にては聖德太子は、如何であります、太子の前世は、支那の衡州南岳の惠思禪師と申て、深智碩徳の高僧でありました。達磨大師の勧めに依て、一千數百年の昔、日本に降誕せしまつて、守屋の大臣が、佛教に反對せる邪見者であるから、之を降伏して、日本佛教の基を開かれたる御方である。(依て妹子の大臣を遣唐使として、かの衡山へ前身所持の經典

を、取りに遣はされたこともあります)是等の理由を以て、眞宗には特に聖德太子の尊像を奉つて、御安置申すことである。其尊像の上には、云何なることが書てありますか、心ある諸君は拜見して御覽「吾利生の爲に彼の衡山を出て、此日域に入り守屋の邪見を降伏して、終に佛教の威徳を顯はす」と書てあります。諸君これらは、論より證據にて、前世があるに相違なひと云ふこと、併せて耶蘇教、及自在天外道杯が、神を造りしと云ふことも嘘、斷見、常見の外道が、唱ふることも嘘たと云ふことも、粗々御了解に相成たせしやう。扱其前世にて五戒を持てる功力に依て、這回人界に受生れたのである。又手是より、未來世のことを辯トませう、前世は過去りしこと故、有りても無くても、どうでもよろしき様なものだが、大事

なるは未来である。若し未来は無きものとせば、何にも後生を恐るゝことも、未来の用意を致すことも、無用のことである。又若し確實に有るものとせば、中々茫然としては居られぬ、屹度驚きを立てねばならぬことである。世には見ゆぬ故に、未来はないことのやうに思うて居る人が澤山ありますが、愚かなることである、見ゆぬから未来はないとは何事である。私は申します、見ゆぬからこそ未来である、見ゆたら現在である、諸君よ見ゆぬ未来の用意をして置ぬと、見ゆた時に非常の後悔致しますぞ。諸君は明日は見ゆぬ故、ないと申しますか、見ゆずとも、明日はあると確信してゐるから、儉約も勉強もせらるゝのであらふ。今日有て明日有るが如く、今世有て未来が必ず有ると信じて、未来の用意を致さねばならぬ。

凡眼で見ゆ種々

全體凡眼では見ゆぬことは、澤山あります、至大・至小・至遠・至近・黒闇は、皆見ゆぬのである。大論には「肉眼は近を見て遠きを見ず、前を見て後を見ず、外を見て内を見ず、晝を見て夜を見ず、上を見て下を見ず」と説てある、至極廣大なれば、見ゆぬものである。彼の人體に依止して生活て居る半風公子に向て、汝が依止り生活て居るところの人體は五尺己上の體にして、汝が體より大なる米麥飯の幾萬粒を一碗として、四五碗も日に三度宛も食して居るものだが、汝これを見知やと云はゞ彼の半風公子は必ず疑念を生じ、それは嘘であらう、私が眼には見ゆぬからと申しませう、人間も亦爾りで。此大地上に家を建て、倉を立て、田畠を耕耘し、山林を伐採して生活して居ますが、扱此の大地は、全體如何なる形のものであるかと問はれ

たら、須彌山やら、地球やら、地平やら、地圓やらトント分らぬでせう、之れは餘り廣大なる故、現在依止りて居ながら、分らぬのである。又至極微細なれば見ゆませぬ、今私が飲で居ます、此コップの水の中でも、顯微鏡を以て見ますれば、多くの細小なる動植物がムリますが、鳥渡見た所では、清淨潔白なる水のみたと思つて居ます、之れはあまり微小たから、見ゆぬのである。又至極遠隔なれば見ゆませぬ、幾分見ても明了にたしかむることが出来ませぬ、現に彼の蒼天に日夜照耀する、日月星辰の如き、實際云何なる物體であるか、明確には分りませぬ。又至て近かければ、是又妙なもので見ゆませぬ、現在の眼の門番とも云うて爾るべき、睫が見ゆませぬ、且つ吾人は、借光眼であるから、大黒闇夜には、寸尺も辨せぬでありませう

現量、比量、聖教

かゝるつまらなひ肉眼を以て、見ゆぬから未來はなひ杯とは、決して申されませぬ。佛教では、事物の道理を測るに、三量法と云ふものが立てあります。三量とは、現量・比量・聖教量である。現量とは、現在實検て量る法にして、所謂冷暖自知の如きものである。次に比量とは、已知を以て、未知を比量するのである、喩へば算法の比例と云ふ如きものである。爰に金子拾貳圓あり、之を三人に分ては、一人の取分、幾金なりやとの問題出たるときは、一人の取分は、未知數である、之れを拾貳圓と三人の已知數を以て、比例算とするときは、答曰く四圓なりと出てまゐります。今未來は凡夫未知の境なれども、已に過去の因に依て、現在の果あることが知れて居るから、之れを以て比量するに、現在の因が

ある故に、必ずや未來の果があると云ふことは、理在絶言でムりませう。況や三明六通無礙自在の佛陀の説き給ひし、聖教量があるから、迷倒の凡夫は仰ひて之れを信じ、未來の用意をせねばならぬ。諺に美濃と近江の寝物語りと申すことが有て、美濃の國と近江の國と云へば、國が異なる故に、其間には二三十里の山坂が隔てをなして居るかの如く想像しますすが、其の實は美濃と近江の國界に至れば、軒を並べ壁を接して、寝物語りが出来る「後の世ときけば遠きに似たれども、知ずや今日も其日なるらん」一息つがされば千載長く逝く、いかにも一日も片時もいそひで安心決定せよの、やるせなひ御教語を深く服膺して、早く後生の用意をして、火車來現の悔を残さぬ様、吳々も切望の至りに堪へませぬ。(おほり)

宗教とは何ぞや (其二)

私は今日此の演壇に立て諸君と相會し、一場の演説を爲すの幸榮を得ましたに付ては、左に掲げたる如く、宗教とは何ぞやと云ふ演題に基ひて、唸辨を振ひ、諸君の耳朶を煩らはす積りであります。諸本題に立入て辨トまする已前に、一言以て諸君に申置ことがあります、そは他事でもないが。當今諸方を巡回して、演説或は説教を致ますに、説教と云へば、何となく下流社會が喜で聽けども、演説と云へば、中等の社會が聞く可きものとして、區域を附るの傾きがあります。云何となれば、演説と云へば、一概に言語も嚴格にして、趣意も六ヶ布ものゝ様に心得、迎も下々社會には分らぬものと認て居からず。然るに私

は、大聲里耳に入らずと云ふ様な、只高尚なる事許り、四角八面に陳立るが、演説と云ふものではあるまいと考へます。元來演説と云ふ文字は、のべとくと訓トて、六ヶ布理も、八ヶ間布事も、了解し易きやうに説き演べて、誰人にも利益を興へてこそ、初て演説の演説たる價値を有するものと思ふ。方今は文章すらも言文一致を尙ぶ況や演説をや。

話の看板の

昔時鞍馬口に、雀亂の妙薬を發明した人がありまして、其の薬をは賣捌くため看板を、當時京都にて有名なる、今大路某なる書家に依頼して書いてもらひしに。今大路は其の看板にはくらの妙薬と書た。乃で頼た人が、くわくらの妙薬をば、何故にはくらの妙薬と御書さ下されたぞと詰たれば。今大路は微笑して答へるには、鞍馬口は田舎にして山樵田夫のみ多く往來

るす所故、くわくらんと書ては何のことやら知れぬ、はくらんと看板を出してこそ、通用するなりと、果して其の看板にて、くわくらん薬をば多分に賣弘めたと申す話があります。今私は佛教妙薬の機能を吹聴して、社會に賣弘め、世人の無明業障の恐ろしき病を、治せしめんとするを以て其の任とするものである。早く云へば佛教の薬賣である。(依て姓も薬師寺と申します呵々)。乃で今大路氏の看板書と一般に、可成丈言語も多くの人に解し易く使用して、高尚の理論をも平易な話として、諸君をして佛教の眞味を咀嚼せしめんとするの、主義を取りて演説致す故、賢明なる諸君幸に言葉の野卑なるを咎め給ふ勿れ。扱諸君よ宗教と云ふものは、元來如何なる運動を爲し、云何なる目的を以て、云何なる功能と價値とを社會に有するものである。

宗教とは何ぞや

りまじやうか。世の宗教を輕々に觀過する輩の説を聞きますと。宗教なるものは、人が死したる後の葬祭の要具なりと云ひます。更に甚しきに至りては、寺院や圓頂方袍者を指して、宗教なりとするものもないではありません。故に眞宗と云へば、本山は緋衣也と信ずるの輩なきに非らず。是れ等は皆誤解の甚しきものと申さねばならぬ。若寺院や僧侶が宗教なれば、寺院が焼失したり、又は僧侶が死去したれば、宗教も滅亡したと申さねばならぬ。世の物質的宗教に拘泥する輩の思考は先斯の如きものである。宗教と申すものは、決してそんなものではありません。寺院は宗教の説聽場に供ふばかり、僧侶は宗教弘傳の責任者なり、依て假令日本の寺院は悉く焼失したりとも、宗教が滅亡したとは申されぬ。只當分宗教の説聽場を失ひたりと云ふ迄である

久米島の葬式泣役

又假令日本の僧侶は悉く死去したりとも、宗教が滅亡したとは申されぬ、只弘宗の人物を失ふたと申す迄である。又若し葬祭の要具の爲めに存する位な、價格なき宗教なれば、強ち佛法でなくとも、外に面白き方法もあります。彼の沖繩縣琉球に屬する久米島には、未だ更に宗教なるものはない、爾れば死期の葬儀は云何するやと云ふに、是れは實に奇妙變なる方法にて、所異れば品變るも亦甚しと申さねばならぬ。そは其の村落毎に泣役なるものがありて、死去の時はその泣役を頼で、ワン〇〇と泣かじめつゝ、葬送をなすの風俗なりと云ふ。此の事は私が鹿兒島に赴任中慥かに聞た所であります。諸君若し宗教が、葬祭儀式に要する迄の具となさば、強ちに佛法と云ふ廣大なるものを使用すとも、此の久米島の泣役風にな

○宗教とは何ぞや

しても可なりでありましやう、蓋し宗教なるものは、そんな死物の司配を主とする、棺桶同様のものではありません、乃で本宗の開祖見真大師は、予が死せば屍骸をば鴨河に捨て、魚の餌に供せよと云はれたと申します、是を以て推知してよろしい、葬祭は宗教の主要目的に非ることが分ります。只是れは宗教の附屬事業と申すものである。爾るに當今は其の附屬事業たる、祭葬にのみ奔走して、糊口を事とするの僧徒多分にして、宗教の主要眞面目たる活動を爲すもの、少數なるは、實に歎かほしきの至りであります。

斯く論ト來つて見れば、宗教は寺院や僧侶にも非ず、葬祭の要具にも非ず、然れば何にものか是れ宗教なりやと云ふに、一言以て之を盡すことが出来る、曰く、宗教は即精神の食物なり。

宗教は精神の食物

乃で身體あれば則ち穀物肉類等の食物を喫用せざれば、身體の衰弱餓死を免れざる如く、苟も精神を有するものにして、之を養成するの宗教の食物を喫用せざれば、精神の衰弱餓死を免れません。かく云へば諸君は、必ず怪訝の念を生ぜらるゝであらう、身體に滋養するの穀肉を食物とすることは、世間共許する所なれども精神の食物と云ふことは、世間不共許の言なり、奇言を好むの辨士なるかなど。實に此の疑念は最なることにして其の最なるが、益々私の演説に勇氣を増す所以である。何となれば、世人の悉く共許する、喩へば火は熱きものなりと云ふが如きことを、特更に喋々論せんとするものは、之を因明の規則に照せば、相符極成と申まして、三十三過の隨一に墮して、所論の宗法に加へません、世間の一方にて許さぬことを、此方よ

○宗教とは何ぞや

り立論して、許と不許の極成宗となり來りてこそ、初て面白くなるのであります。今精神の食物と云ふことを、普通社會にては許さぬことにて、私が此の佛教演説の愉快を感ずるのでありますと申せば、大變な事の様であります、左程のことでもありません。

我佛教にては、食物に付て四食と云ふことを分別してあります其の四食とは、團・觸・識・思の四にして。第一に團食と云ふは、是れこそ世間共許の食物にして、之を團食と稱するは、分々團々に喫込むを以て名けしものである。第二に觸食と云ふは、身體に觸對する境を食とするのである。喩へば肌に襯着する襦袢にフランネルの如き柔軟物を用ゆれば、衛生上に宜しと云ふが如きものである。第三に識食とは、識は心識にして、即ち

吾人の心を以て直に食物となすのである。是れ現に吾人が此の四塵四大の假合物たる身體が、幸にして腐敗壞亂せざるものは此の心識ありて之が食物となり、命根を維持するからである。第四に思食とは、即ち心中所現の思想を以て食物となすのである。りて、彼の沙囊を懸て米なりと思はしめ、兒童の命脈を保持したりと云ふが如き。又或る軍兵が大山を攀るに當つて、兵卒悉く渴し、將に斃れんとした時に、大將は策を廻らし、大聲疾呼して曰く、皆々勇氣を振うて此山を踰へよ、彼に梅林あり今や好く熟す、往て之を取り食ふ可しと。兵卒此の聲を聞くや、口中自から水を生じて以て渴を醫し、健けに其山を越へたりと云ふが如き、是れ皆思食と云ふことの好き例である。今宗教なるものは、即ち是の思食である、依て宗教を深信するものは、

眞に無限の愉快、無究の歡樂の思想が心中に生じ來りて、所謂
 歡喜踊躍せしむる。乃ぞ宗教に依て精神を養成したるものは、
 世間にて悲惨苦痛の境遇に接するも、外部の雜縁に障へられず
 して、正念の中に怡然として樂むことを得るのである。
 然るに世には佛法聽聞を達例にするものがあると、惠燈大師の
 歎息し給ひたることがあります。是等は實に全然宗教の何も
 のたるを知らざる、所謂食はず嫌ひなるものである。眞にこれ
 を信仰してみれば、所謂「佛法は氣のつまるものかと思へば、
 信心に御慰み候ふ」と云ふ有様になりて、不可言の快味を感ず
 るものである。之れを「愛樂佛法味禪三昧爲食」と説かれてあ
 る。諸君希くは食はず嫌ひを止めにして、此の宗教即ち精神の
 食物を得て、心識を養育發達せしめて、今世も心廣く體胖かに、

愛樂佛法
味

未世は無碍自在の安樂國に往生せられたきことである。然るに
 世人は、僅に五十年、一萬八千日餘の間寄留する、此の形體
 を養成する、團食を求むることには汲々競々、日も足らずと云
 ふ勢ひにて、東奔西走右往左往すれども、此の無量永劫盡る期
 もなき、精神の主人公を養成する、宗教を求むることは、更に
 もて念頭に置かざるものゝ如きは、實に輕重大小を誤るの甚し
 きものと申さねばならぬ。

私は曾て或る畫工の家の前を通行するに當り、不計奇妙變的な
 る畫を見附けました、それは提燈と釣鐘とを天秤に掛けたるに
 提燈が下りて鐘が上りてある圖である、實に諸君奇態な圖では
 ありませんか。天秤と云ふものは、重きものは先牽くが當前で
 あつて、而も提燈と釣鐘と云へば、比較の取れぬと云ふ喩に出

提燈と釣
鐘の畫圖

す位の物質である。而るを提燈が重く下りて、鐘が軽く上りてあるとは、さてもく、是れは何事かを寓意して寫出けるならん、暫時佇立して觀念したれども、當時は終に解得することが出来なした。爾るに近頃に至りて突然思ひ當りました。是れぞ即ち世人が、事物の輕重大小を反對に誤り居ることを寓意して巧に畫出せしものである。實に一萬八千日間の寄留所たる、形體のために役われて忽々一生を暮し、無量永劫火坑に墮ちんとする、精神の安立を全然忘却し居る様は、提燈が下りて釣鐘が上りたるよりも、一層甚たしき誤迷案と云はねばなりません。是れを釋尊は、世人が不急の事を争うて急務を知らぬと、大無量壽經に御歎息あらせられた。諸君よ、思慮多きが故に人と名けられし吾々なれば、少しは餘念を去て、是等の點をも沈思熟考

せられたきものである。上に論ずるが如く我々は宗教を精神の食物となすものなれば、恰ど肉を食とする動物を、肉食動物と云ひ、菜蔬類を常食とするものを、菜食動物と名けらるゝ如く吾人を或學者は宗教動物なりと云ひました。それ然り、宗教動物なるが故に、人たるものは宗教を信するを以て最大要務とし又之に依て精神を養成發達して、二世の幸福を全してこそ、初めて人界受生の大目的を達したと申すものであります。爰にて暫時休息して、後席に於て更に宗教の名義よりお話致しませう。

宗教とは何ぞや (其二)

前席に於て辨せし如く、人は宗教動物なるが故に、宗教信仰を以て最要急務とせねばならぬ。然るに此の宗教なるものは、海

の漸々に深廣なるが如く、終には「二乗非所測唯佛獨明了」と云ことにならるなり。依て初より深理の談を爲すは、反つて諸君に利益を與ふることの薄きを感じますれば。今席は極々淺近なる、申せば佛敎大海の磯邊咄と云ふやうな、宗敎の名義丈を辨明致しましやう。

諸君よ此の宗敎と云ふ字は、云何なる意味を含蓄する名詮でありまじようか、先づ敎と云ふ字は、聖人被下の言と釋して、大聖世尊が、開悟成道の上より、下迷界に彷徨せる、群生に被むらしめ給ふ言葉にて、即ち七千餘卷の經文が是である。扱宗と云ふ文字を伺ふに付ては、先づ佛書を講究するには、一義に無量の名あり一名に無量の義ありとて、一の義にも種々の名目を附けて、益す其義を明かにすることあり。又一の名にも多を含

と云うて、多々無量の義理を含蓄することもあります。今宗と云ふ一名にも、隨分多くの義を含んで居ます、今は之を約めて三義として辨トまじよう。其の三義とは、尊也・崇也・主也の三にして、第一に尊也とは自體尊貴を云ふ、宗敎其物の自體が至極尊貴にして、當に日本國內でのみ尊貴なるにあらず、十方世界中にて無上獨尊である。乃て佛敎の道をは、梵語にて阿耨多羅三藐三菩提と云ふ、之を漢に譯せば、無上正遍道とありて、此上もなき勝れたる道が此の佛道である。第二に崇也とは、他より崇敬することにて、宗敎其物の自體が尊貴なるが故に、上等覺の大士を初として、云何なる智者も識者も、渴仰の頭を垂れて崇敬信順する。諸君よ我が佛敎が、實に方今此等の現象を示しつゝあることは、近來内國の狀態と云ひ、海外の事情と云ひ

甚だ明白でありまじよう。之に反して彼の外教は如何です、野蠻世界には無鳥島の蝙蝠と一般にして、意氣揚々羽翼を張て飛び居りしが、近來は西洋各國の宗教研究も大に開け、啻に有識者より崇敬を受けざるのみならず、一般アーメン主義の國民も、アーメン倒など惣免を食ひつゝある、其の有様は哀なことであります。之れと申すも畢竟彼の教は、耶蘇一己の妄想より現出したるものにして、天地の眞理に基つかない、乃で自體が尊貴ならぬ故に、識者より彈斥を受け、文明世界程崇敬を受けることがならぬのである。爾れば彼の教は彼の徒らよりは宗教と稱すれども、吾儕の眼光より照せば、尊也、崇也がなきゆゑに眞誠の宗教とは申されぬ。

扱て第三に主也とは、あるトにして宗教は何のあるトなりやと

第三、宗
教に心の
主なり

云ふに、即ち人心の主也と申すことであります。(此の義は古人未發の義にして、晃照一己の私見であります、古人の説に従へば、主也とは、其の經一部の主要とか、又因明に宗・因・喻三支ある中、初の一支が所論の主位に立つとか云ふ様に釋してあります。それをば今私が隨宜轉用して、人心の主也と解釋を下すのであります。蓋し是れ隨宜轉用だから別に差問はあるまひと思ひます。惠燈大師も、安心と云ふ二字を心得易ひと云ふ邊より、されば安心といふ二字をば、やすきころとよめるは、此のいわれあるゆへなりと、轉釋し給ふた例もあります) 抑も一國には國の主、即ち天皇陛下ましくて、全國を統治し給ふ故に、四海も風波平穩に治まることが得る。又一家には戸主ありて、家内を安全に治むることが出来る、それが如く人の心は宗

○宗教とは何ぞや

教の主がありて之を司配してこそ、初て心を正し身を脩むること
とが出来るのである。若人の心に於て宗教の主人公無かりせば
國に國王なく家に戸主無ければ亂れるが如く、必ず心散亂し
て身の行ひ脩まり難いでせう。

然るに或る學説(心學等)によれば、我心を直に主人として、心
を正し身を脩むることが出来ると教ますが、諸君如何でありま
よう、私は我心に一任して、以て立派に品行道徳を脩むること
は出来まいと思ふ。なせとなれば、若し吾人の心が佛心と等く
悲智を以て充たされたる清淨心なれば、之を主として、心の
欲するに従へども、則を越へぬでありませうが、吾々凡夫心は
中々そんな立派なものではありません。是に付ては、先吾人の
心は元來如何なるものか、之を佛敎の心理學上に照して、研究

して見ねばならぬ。先づ俱舍論の説によれば、六識心王、四十
六心所、合して五十二種の心を立てます。また唯識論では、八
識心王、五十一心所、合して五十九種の心を分ちます。其の又
心所をば、大地法・大善地・大煩惱地等と分類します。大煩惱地
法は、鬼角惡に走る心、大善地法は、善に進む心、又大地法は
何れにも隨起する、内股膏藥主義の心、如是一々之を羅列分類
して辨ずることは、中々一朝一夕の談でありませぬが、先々斯
やうに説てあります。此の如く申せば、諸君は必ず奇異なる念
を起さるゝであらう、吾人の心は一なりと思ひに、かく多數
なる心がありとは、如何にも奇妙なる談であると思はるゝなら
んが、論より證據が第一故、諸君が先自ら心に問て見られよ、
能く分ります。此頃嚴寒の際晨起するに當り、如何です、一方

より最早夜明けたり、起て家事を齊へんと云ふ善心が起りませう。其のとき又一方よりは、ア一寒ひく今暫時寝てをろ一と横着心が起りませう、其のときは諸君の心は蒲團の下にて、一の戦争を起し、遂に何れかの心が勝を得て、直に早起するか將九旭日三竿枕を高くすと云ふ場合に至るかである。此にて諸君試みられよ、若心が一體なれば、かく戦争する筈はありますまひ、此の早起を欲する心をは、大善地法の中の勤の心所と名けてあります。又かの横着心をは大煩惱地法の中の懈怠の心所と名けてあります。其外種々萬端の境遇に交接する間にも、常に如此であります、仍て之を遂一推究め見れば、成程五十九種の心もあります。然而吾人凡夫は兎角善心が勝を取らずして、悪心が増長するが常である。乃て吾人の心性をは、彼の荀子は

性の善惡についで

悪也と判つた、又本宗にては祖師は、「悪性更に止め難し、心は蛇蝎の如くなり」との給ふ。(心性のことに付ては、孟子は善也と云ひ、揚子は善惡混すと云ふ。又佛教にては、華嚴には無自性と云ひ、天台には性善性惡と談つ、法相には五性各別と論ず、かくの如く内外の學説實に六ヶ布事故、之は他日の別論とせん)。

心の主人

扱心性のことは、兎も角も、悪心常に勝を得つゝあることは凡夫心の常態である。乃て大經には、「心常念惡、曾無一善」と説き、有經には「衆生一日一夜八億四千念、念々所作皆是三途業」と説き給ふ、是の如き心故に、諸君よ、吾人の心をもて直に主人公として之に一任することは、誠に劍呑なることであります。諸君よ彼の監獄の下に呻吟して居る囚徒は如何です、宗

○宗教とは何ぞや

教心なき心をもて、主人とせし故でありませう。又見られよ彼の三悪の火坑に叫喚せる罪人を、彼等は心を主人公とせし故でありませう。依て惠燈大師は「其のまゝ我が心に任せば、かならず誤りなるべし」とも、又は「心にまかせずして心を責よ」ともの給ひ、有經には「心は是第一の讐なり、此讐能く汝を縛して、送りて焰羅王の所に至らしむ」とも説きてある。乃で此の心に任せずして、心を責める主人公に宗教を以てせねばならぬ。惠燈大師は「佛法を主として世間を客にせよ」と諭し給へり。又古歌に「煩惱の客人はあらばあれ、南無阿彌陀佛を家主にして」とも詠めり、佛法が心の主人となると、凡夫心は御客になる、客は主に對して氣兼ねし、且萬事指揮を受けねばならぬ。依て不善の心起らんとするときは、佛法の主より

佛法は主
世間は客

諸悪は作す莫れ衆善は奉行せよ、自ら其の意を清せよと命令が下る故に、善は小なりとも之を勤め、悪は小なりとも之を慎む心になりて、一生は妙好人となりて美く暮し、來世は其の主人公に手を引かれて、淨刹に往生することを得る、これに付て面白き咄がある。北陸の或同行は悪き客來りて、不道德なる談をする、不在々々と云うて更に相手にならぬ。若し善客來りて道德、或は佛法の話をなせば、主人御在と云うて、吾を忘れ時を忘れ相談合せしと云ふ。實に佛法の主を心に貫受たるものは此の如きものである。諸君よ何卒此の同行の如く、佛法を心の主として、生ては皇國の良民となり、死して極樂の佛果を證し現當二世の幸福を全せられんことを、滿堂の各位に切望致します。

宗教とは何ぞや (其三)

吾人の精神

前回に於て宗教の名義を演説し、遂に宗教は吾人の精神の主人公なることを辨じたまはしが、實に宗教なるものは、吾人の精神の主人公として見れば、焉より貴重最要なるものはありますまい。と申すは、吾人精神の主人公なれば、即ち是國家の主人公と爲りまじよう、何となれば、抑も國なるものは、山川原野の謂に非ずして。即ち人民集合の團體に名けしものである。然れば國は人民の集合體にして、人民は國の要素である。然り而して其國の要素たる人民の精神に立入て支配す可き主人公が、即ち宗教なりとて見れば、宗教は國家の主人公と申すも、敢て不都合はありませんまい。乃で此の國家の主人の位に立つ宗教が

國內萬民の精神に立入て、悉く之が支配を爲し、諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意ならむるに至らば、實に社會は、釋迦如來の豫て「大無量壽經」に説きたまひし如く「天下和順、日月清明、風雨以時、災厲不起、國豐民安、兵戈無用、崇德興仁、務脩禮讓」の有様となり。早くまうせば、極樂の出世なりと云ふ如き世界と變化し、警察官も、捕縛拘引すべき犯罪人なくて無事に苦み、裁判官も、訟を聽くこと我猶常の如くなれども、更に訴ふる人なしと云うて欠伸し、監獄署も設けたりと雖ども、更に入來る囚徒なくして、門前雀羅を張ると云ふやうになり。又世に戰爭程恐るべきものはなけれども、是亦無きことになりて海陸軍も無用に眠し、國豊かに民安らかに、天皇陛下は御枕を高して御坐まじくても、四海波靜に治まるやうになりまじよ

○宗教とは何ぞや

う。爾れば宗教なるものは、之を小にしては一個人心の主人公となり、之を大にしては、天下國家の主人公となれば、實に貴重最要なるものは宗教である。如是實に貴重最要なるものなるが故に、前回到辨せし如く尊也、崇也、主也の價值がなくしては、眞誠の宗教と仰ぐことは出来ません。然るに諸君よ爰に困つたことがあります、眼光を放て廣く天下を眺て御覽なさい、宗教なる名目を帶て、社會に蔓延流行せるものは、古今萬國に幾種ありや、枚舉に違あらざる程、種々雑多のものがあります。現今日本に在るものゝみにても、佛教、耶穌教を初として、黒住、天輪王等夥しくあります。而して其の教、其の門に就て聞くとときは、互に我を是なりと云ひ、是れこそ主人公と頼む可き、尤も良教であると申しますから、之を

類 宗教の種

聞く人は誰れか烏の雌雄を知らんやと云ふ場合になり。一般に同等なる宗教なるやうに心得、何れに入るも得たり、兎角有縁の法によれど、輕々しく妄信の弊を生じ、案外なる邪教を信仰して、貴重なる精神をも、鰯の頭や、狐狗狸や、又臆病神杯の奴隸となし。甚しきに至ては、一國の元氣たる日本魂をも奪はれて、終には國家を擧て彼の修羅道の出店を見たりやうな、殘忍剋薄なる異國の奴隸となす様な、大變なる出來事を惹起すに至ります。(印度安南等の殷鑑あり、前車の覆へるは後車の誡め、御用心々々々) 故に諸君よ、同一に宗教と假稱すればとて、決して輕々妄信は出來ませんぞ。是に於てか諸君は、能々注意なされて、何れの宗教か果して吾人の主人公と依頼すべき、眞誠の宗教なるかを選択判別し、邪惡なる宗教を捨て、正善なる眞

○宗教とは何ぞや

宗教に入らねばなりません。然れども宗教の善悪邪正を選択すると云ふことは、随分に困難なる事業であります、仍て之をば如何したらば宜ろしうありませう歟。有人は申しました、今日心理學によれば、人の心には智・情・意の三類があると申します。就中智なるものは、孟子も是非の心は智の端也と云ひし如く、事物の是非善悪を分別決擇するが智力の作用故、此の心に訴へて選擇せば可ならん。私の考へまするには、成程之も可は可なれども、元來此の智なるものは、時ありては一方に在る情を忘却して、作用を誤ることがあるものです。世の俗諺にも「惚れて顔見りやホクロもエクボ、跛引くのも所作の好さ」と、是れは惚れたと云ふ情より智力を味却して、是非の判断を誤ることを云たものであります。

よう。方今の社會には、西洋恍惚先生が澤山ありまして、舶來と云へば、早や上等の代名詞に思ひ、洋物と云へば、既に好品の事なりとするやうな状態にて、宗教のことも、耶穌教は西洋各國に傳播せる教ゆゑに良教なりと、大早計に判断を下し、軽々しく仲間入する族がありて、實に歎息きことです。是れと申すも西洋崇拜主義の情よりして、智力を味却して判断を誤りたものであります。乃で私は、人の智力のみに一任して選擇せしむることは、至つて劍呑た不都合だと思ます「離婁の明、公輸子の巧も、規矩を以てせずんば、方圓を爲す能はず」と云へる古語もある通り、如何に智目明かに分別巧なりと稱せらるゝものも、爰に一の規矩を用ちひずんば、或は前に辨せし如き、濫選妄擇なきを保せられませぬ。依て私は今日諸君に、宗教選擇

の規矩を傳授しようと思ます。

扱其の規矩は何たと申しますと、即ち學術的規矩である、學術的規矩とは、如何なるものなりやと云ふに、世には書を開き文を解し、字を筆しさへすれば、早や眞の學術たと思ふ人もありなすが、之れは大なる誤解にて、眞正の學術と云ふものは決してそんなものではありません。讀と書とは、唯是れ眞正の學術的に達する階梯なるに過ぎぬものである。しかれば眞正の學術とは如何なるものなりやと云ふに、曰く、學術なる者は、宇宙の眞理を研究するを以て目的とし、而して其の目的を達するに比較と、實檢と、索跡との三の方法をもてする、是れが眞の學術である。其中第一に比較とは、甲乙彼此を比較對照して、是非善惡を判別するのである。事物は偏見と云うて、一邊計りを

見て他邊を見ずしては、決して是非長短の分別は付きませぬ。早い喩へが、當所にて諸君は皆列坐して、私は此の高き壇に居る故に、比較を取らずに見ると、私が一番高き男子となる。然るに同トく此の壇に、私よりも遙か高き、六尺餘もある人が来て比較せらるゝと、私の短身は鮮かに分ります。それが如く宗教も、一方の教のみ聞て居ては、決して邪正が分らぬ、故に遂に妄想神をも、獨一眞神と尊信するに至ります。仍て諸君希くは此比較的に訴へて、多くの宗教を虚心平意に比較し、研究して御覽なさい、必ずや良否邪正は分明になります。此頃社會に比較宗教學なる一科が御坐りますも之が爲です。扱第二に索跡とは、事跡を探索するの學にして、所謂歴史的に事物を搜索することです。猶し人物の善惡を知るに履歷を推す

が如く、教法のこともまたその通り、其の起原より來歴を詳かにするときは、將來國害を醸す教なるか、將た國益を増進する法なるかは、青天白日より明白になりまじよう。又第三に實檢とは、實際經驗の學にして、總て事物は、皮相外面のみを輕視して、大早計の判斷を下す時は、大に誤解謬斷を免れませぬ。故に必ず實際に就て、能々檢覈することが必要であります。是れに又二つの法方がありて、一には分析試檢、二には保合實用です。第一に分析試檢とは、即ち化學的に事物を研究することにて、事々物々を皆分析して、善惡良否を檢査するのである。喩へば酒なるものは有毒物にして禁すべきものなりや否やを知らんとせば、酒質を分析して檢せねばならぬ、之が分析を試むれば、アルコール質を多分に包含して居る、アルコールは刺撃

劑、魔酔劑なり、故に有毒物なり、不可不禁といふことになるから、禁酒家や節酒者が續々起るのであります。二に保合實用とは、物質其ものを其のまま實用して試檢することです。喩へば彼の禹王が、犧狄が獻せし酒をば、一度口にして見れば甘味なれども、後世必ず酒を以て國家を亡す者あらんと謂て、犧狄を疎んたと云ふことがありますが、是れが即ち實用試檢なるものである。

今宗教のことも、只皮相の美觀に瞞着され、又舶來教故に善良なりと云ふが如き速斷を下すは、大なる誤迷斷です、仍て之を實檢學に訴へ、第一に分析試檢せねばならぬ。無形的なる宗教をば、如何に分析するやと云ふに、隨分無形的にても分析が出來ます。凡そ事には基礎なるものと、目的なるものと主義なる

ものと、手段方法綱領等のことがありますが、故に此等の條目に徴して分析が出来まじやう。甲宗の基礎は如何ぞや、乙教の目的は如何ぞや、主義は如何に、手段は如何に綱領は如何にと、逐一分析討究せば、何れの宗教と云へども、能く其の實際を觀破するに足り、良否邪正も分明昭々するに至ります。扱て又第二に保合實用の法に依て、宗教は實際心に受け身に行ふと見れば、彌々善惡も鮮明になり來るに相違ない。諸君よ私は右辨せし、學術的に宗教を研究することは、實に宗教選擇の良規矩だと信トますが、如何でありまじよう、諸君も定て御賛成下さるでありませう。然れば諸君今後は是等の方法によりて、宗教をしかと研究なされ、決して輕々しく妄信のなきやうに願ひます。惟ふに諸君が此これらの規矩に準じて宗教研究をなされたならば

果して眞誠の宗教、國家、人心の主人公也と仰ぐ可き價值ある宗教は、佛教であると云ふことが益す分明になるに相違ないと信トます。またぐ辨トたきことが山々ありますが、暫時休息して更に後席に於て辨明致しまじよう。

宗教とは何ぞや (其四)

前席に於て宗教なるものは、之を小にしては個人的即ち人々個々、之を大にしては國家的、即ち社會の主人公の位に立つものなるが故に、輕々しく妄信の有害あることを論ト、遂に學術的擇法眼を具へざる可からざること迄を辨述して、壇を下り休憩席に就きし所。有る一人突然と入り來り、出拔に發言して曰ふには、只今の如き宗教を信するに、學術的とか何たのと六ヶ布

演説に就て質問者

○宗教とは何ぞや

理屈や八ヶ間布事を陳られて、中々吾々は一往の了解すら出来ませぬ。元來眞宗の教義なるものは、本爲凡夫にして、易行易修の御法では御座りませぬか。うれに斯様なることを辨せられては、實に如何にやと案ト氣が起ります、何卒難有様な所と勿體ない廉目と恐ろしいやうな場をのみ、ちよこくと説教して被下ませよとの注文をして去りましたが。一般に諸君は之と同腹にて、又此の注文は最千萬なることと思はるゝや。もとより凡夫と云ふものは、寢て居て牡丹餅が食たい、濡手を粟の擲取りがしたいと云ふ横着動物だから、是の如き注文の出るのも、凡夫の眞情より云へば最千萬なれども、我教義上より申せば、是の如き注文は、啻に承諾が出来ぬのみならず、痛く叱責を加へねばならぬ。何となれば易行易修の御法なればとて、之を求め

法は大切
に求めよ

之を聽聞するに方りて、何れの所にか唯たちよこくと、輕々に聽聞せよと教へられてありますか。
中興上人の御言杯を拜讀して見られよ「大切に求めるより信は得べきなり」とも、又「命を捨て、望求めるより佛法は聞得るなり」とも、又「至て堅きは石なり、至て柔かなるは水なり、水能く石を穿つ、眞源も徹しなば、菩提の覺道何事か成せざらんと云へる古き語あり、いかに大様なりといふとも、聽聞を心に入れ申さば、御慈悲にて候間信は得可きなり」とも、又「聞と云ふは、只大やうに聞くにあらず、善知識にあひて、南無阿彌陀佛の六の字のいわれを、能々聞ひらきぬれば」云云。又「大無量壽經」には「設滿世界火、必過要聞法、會當成佛道」等と、之を高祖の和讃に「たどひ大千世界に、みてらん火をも過ゆきて、

信前求法
受一念信

佛の御名を聞く人は、ながく不退にかなふなり」とも、其の他何れの所にてても大切に求めよ、能々聞開けよとのみありて、更にちよこくと聞けよとの玉ひしことはありません。併し前陳の如きことを申出る輩の起りたるは、是蓋し信受一念位と、信前求法位とを混同して聞法せし故でありまじよう。其の故は、當流の法義は、宿善開發して一念信受の當位は、所謂何のやうもなく、何の煩ひもなく、あら心得やすの安心や、又あら往きやすの淨土やにて、三祇を一念に越へ、諸聖を片言に等するを得る、誠に易行道であります。けれども此一念信受の位を取違へて、信前求法の位に居する者が、易行道たからと云うて大様に打流し、浮々と聽聞して、是れが易行易修の御法たと認むるは、大變なる誤解であります。信前求法位に於ては、命を捨て

望求めよと垂訓し給ふに非ずや。命とは息の内と云へる畧語にて、命を捨るとは、息の内なる五十年乃至百年間の事をば打捨て、未來永劫の苦難をば免るゝ御法を求めよとなり。實に後生の一大事が心に知られて見れば、たとひ大千世界に炎々と満てる火中を、かきわけてなりとも求めばならぬなり。それに何ぞや前に辨した位なことが了解し難ひ、六ヶ布ひからとて不平を鳴らし、了解が出来ねば、更に尋ねて聞く程の熱心もなき者なれば、私より之を見ると、また更に求法の精神之れ無きものなりと申さねばならぬ。「大經」に「憍慢弊懈怠、難以信斯法」と釋尊の歎息し給ひしは、實にも是等の輩のことならんと存ず、是の如き浮々とした求法者のみ多きゆゑに、世間には浮萍信者が澤山ありて「うき草や昨日は東今日は西」と云有様にて、周章

耶蘇教
佛

と狼とで一生を暮し、遂に臨終今端に至りて、或は題目、或は念佛と、渴に望んで井を掘るやうな騒立するものが御座ります。西國の有人は、一時頗る眞宗の熱心家なりとの高評を世に受居りしに、有時ふと耶蘇教師來訪し、勸告して曰ふには、君は頗る眞宗を熱心して、南無阿彌陀佛を稱ふれば、未來のみか此世まで、利益を得るときわもなしと云うて喜んで御座るそうだがそれは大なる迷信でありますぞ。中々未來どころか、此世に於ても、不利益さわもなきが佛法なり、何となれば元來佛法なるものは、募財主義、糊口目的より成立しものなり、そは論より證據にて、目今僧徒の爲す所を見よ。さ一御賽錢たの、さ一御冥加金たの、イヤ御布施たの法禮たのと色々名稱を附して、金錢を貪ることのみ汲々然として居るに非ずや、乃で此法に入る

ものは、僧徒の方には此世の利益際もなきか知らぬが、信徒の方に取ては、不利益さわもなく、終には財散ト、寶盡きて、今世生乍ら、餓鬼道に墮し、襤褸を纏うて路頭に彷徨するに至ります。之に反して私共の信する基督教は、博愛主義、慈惠目的なるが故に、貧困の輩には金錢衣服をも施與し、書籍をも投して以て法を聞かため、二世の幸福を完受せしめんとする眞の良教であります故。あなたどうぞ佛教を離れて、耶蘇教を信仰なさいと、甘言喋々の下、三寸の舌の中に籠絡せられて、頓に翻りて耶蘇教に皈入しましたるが、是亦世評の高きとぞありました。然り而して今の人が、初の程は親切にも教誨して呉れ、小冊子杯も時々送りて、更に金錢を貪る風の見へされば、好い事とたと喜びて居りしが、漸くにして後々になると、小冊子杯も贈吳

二兎を追
をふて一兎
を得ず

れぬのみか、サー教會金たの、サー學校費たのと、頻りに集金主義を唱へ出し、佛教信徒たりしときより更に甚しく。且又其の宗義と云へば、十字架の贖罪説は、彌陀の本願に比較して見れば馬鹿々々しく、信仰と兼てある間に大病に罹り、將に露命も散りなんとすれども、決定の安心としては胸になく。或はアーメンをも稱へて見たり、或は題目をも唱へて見たりする中に、彌よ臨終一刹那となりたれば、益す周章狼狽して、終に阿亞釋迦妙觀勢と、唱へたなりで、溘然として逝きしとか申します。阿亞釋迦妙觀勢とは、陀阿彌佛に、亞孟に、釋迦牟尼如來と、妙法蓮華經の御題目と、觀世音と、大勢至菩薩とを合稱して頼んだのです。是の如く多くの神や、佛や菩薩を祈願して置けば何れの御方なりと、御助け下さるならんとの、妄想より起りし名稱でありまじようが。古語に云ふ「二兎を追ふものは一兎をも獲ず」と、哀れにも此人は六方に向つて頼みたれども、一方よりも攝取を得ずして、空しく火坑に沈淪したのでありませう。是れと申すが他ではない、畢竟擇法眼を具へずして、只チヨコくと聞いて輕々しく妄信せしが故であります。若し此輩にして、擇法眼を具し、比較索跡實檢の上より信仰せしに至るものなれば、決して異學異見別解別行の人の爲めに、動亂破壊せらるゝことなく、所謂金剛堅固の信者となられたでせう。其の故は若し佛、耶二教に比較して、索跡、實檢して見れば、果して彼徒が云ふ如く、佛教は集財主義、糊口目的より成立ものなる歟。又耶穌教は博愛主義、慈惠目的より成立つ教なる歟。丁度彼れが言の正反對に出るの事實を發見するのであらう。

○宗教とは何ぞや

試に見られよ、我が眞宗の開祖見眞大師はいかゞです、辱なくも彌陀願王の生尊貴家の願に乗じて、關白藤原の家に御誕生あらせられて、朝廷に仕へて榮華をも開く可かりし御身であり乍ら、九歳のときに之を棄てられて、入道學行と給ひ、滿九十歳の夕迄、草鞋竹杖にて辛酸艱苦の御巡化は、只是れ興法利生の御目的に外ならず。又佛教の大祖釋迦牟尼尊は云何です、是亦生尊貴家の願力より、摩訶陀國迦耶城、淨飯王の御太子に御降誕遊ばされ乍ら、十九歳の御時に見老病死悟世非常より、宮中色味の間を離れ、棄國財位入山學道、遂に三十成道の曉より、八十入涅槃の夕迄、道教を廣宣なされたは、ひとへに是れ群萌を救ひ、恵むに眞實の利を以てせんと思召すゆゑである。此の事實を探索して見れば、佛教の主義目的は、諸君に於ても

能々明白に了知せらるゝでしよう。若し外教徒が悪口する如く佛教が集財主義や、糊口目的で成立つものなれば、安んぞ見眞大師や釋迦如來が、是の如き尊貴の家を出で、國や財を捨て、苦學難行と給ふの理がありまじようか、實に外教徒等は驚入た妄言を陳べて、世人を瞞着するものです。併し今日の獅子身中の蟲たる、デモ坊主やカラ信徒の中には、まゝ糊口目的で、出家の相手を装ふ者が不在ではありませんが、それは何にも佛教と云ふ譯ではない(あれは蟲ですから)丁度米中の虫が生たる様なものです。諸君は蟲が居るからとて、米を捨てはなさるまい佛教獅子の身中に糊口目的の蟲が生たればとて、それ故に佛教までも棄べきではありませんまい。

扱之に反して、彼のイエスは云何です、ゴッドは生尊貴家の願

イエスの
來歴

がないと見へて、見真大師や釋迦と違ひ、猶太國のベツレヘムなる寒村僻邑に住する、シヨセフとマリヤ夫婦なる、大工職の素寒貧家に生れ來たものです。それより貧の盗みと云ふ諺に洩れず、親子謀計を回らし、摩西豫言者の言を奇貨として、イエスが三十になりたる時、ガリラヤ邊の愚人賤民を瞞着して曰には、我は天地の君なり、諸父の父なり、諸王の王なり天上地下、諸の權威は、皆我が掌裡にあり、汝等羅馬皇帝の治下を離れて我に従へ、羅馬に納るゝ諸税を我に奉せよと謂て、自ら國民の粗税を畧取しつゝありし、是の如き大盜を働きたるが原因となりて、終に十字架に附して殺されたのです。爾れば諸君彼の耶穌教こそ集金主義、糊口目的より起りし教なることは、此の索跡上蔽ふ可らざるの事實でありませう。而して又此の教を奉ず

口に密めるもの尻に針あり

るの徒が、耶穌教を以て掠國奪地の機關に使用せしことは夥しき事實がありませう。然るに方今日本に來て、博愛主義たの何たの口に甘言を吐き、少々貧民を救助すればとて、決して油斷はならぬ。口に蜜あるの蜂は尻に針あり、奪はんと欲するものは先與ふるの諺の如く、今日の彼等が爲らつゝある手段は、他日彼等が果さんとする大目的がある爲です。諸君注意し給へ、前に申した西國の有人も、爰まで了知して居りしなれば、決して斯様な狼狽はしなかつたでしよう。乃で諸君希は擇法眼を具せられよ、若さもなくして輕々しく妄信せられては、第一には個人的、即ち前に出した人物の如き、一生周章狼狽て終らねばならぬ。第二には國家的、即ち社會の大害を醸すに至ります、故に今後は宗教を輕々に附し置くことなく、一大事と云ふは是れ

○宗教とは何ぞや

なりとの訓言を深く肝に銘ト、大切に之を求められよ、大切に
求るより信は得らるべきである。

三面的の吾人なるを知れ

私が今日辯トまする演題は、三面的の吾人なるを知れと、左に
掲げて置ました。諸君は、此の演題を見て、必ず奇態なる演題
かなと思はるゝならん、今日迄十一面觀世音たの、又七面鳥た
杯と云ふことは聞たことも見たこともあれども、二面的の吾人
とは何ことである。我々は化物ではなし、二面あるものか、ちや
んと一面しかない杯と、妙な想像を起こされしならん、乃て物
事は聞かねば譯が分りませぬ。サ一是からボツ／＼辯トます故。
靜かに御聽を願ひます。

個人的
國民的
佛的
三面

扱三面的の吾人なるを知れと申すは、何にも諸君を化物とし
て云ふのではありません。本來の面目たる吾人の此の一面が、
即三面的のものたど、心得ねばならぬと申すのである。そは又
何故と云ふに、我々がこゝして仰で佛を禮する此の面は、即佛
教信者の面である。又眼を四方に注で、國家の利害を察する此
の面付は、即國民的面である。又頭を低れて一身の將來を思ふ
こゝした面は即ち個人的面である。分りましたか斯様に辯ト來
て見れば、吾人は實に三面的のものたど申さねばなりません。ま
い最も宗教も信仰しない、國民の一分にも加へられぬ、禽獸如き
ものならしめば、かくは申されませぬども、苟も日本の國民に
編入せられ、佛教信徒の名義を有する已上は、三面的のものた
ることは免れませぬ。爾ればかく三面的の吾人たる已上は、之

○三面的の吾人なるを知れ

三面各々
義務あり

に應ずる三面的の義務を盡さなくてはならぬ。彼人は何所其所に面があると云ふならば、其面に對して義務を果すが、社會一般の習でありませう。仍て仰て佛を禮拜する佛教信者の面あれば、之に應つて佛教に對する義務と云ふものを盡さねばならぬ。又國民的面ある已上は、其に應つて國家に對する義務を盡さねばならぬ。又個人的面に向ては、可成他人の厄介にならぬ様、獨立自治の精神を勵まして、一個人たる資格を全する様、勉強せねばならぬ。かく一面にして三面的、一身にして三方に向ての義務を負擔せる吾人なるからは、吾身たけよければ、國家は滅亡するも、佛教は衰退するも、我れ敢て關せずと云て、雲烟過眼視しては居れぬ。常に此三面に向て、吾身は立身出世せよがし、世の中安穩なれがし、佛教弘まれがしと念つ、且務めね

ばならぬ。

これに付て爰に一の注意す可きことは。無常轉變とかはる世の中故に、常の時と非常の時とがある、其の常の時に處しての心得と、非常の時に當ての心得とである。其の常の時即平穩無事の時に處しては、三面的の中他の二面を忘れずして、而も個人的面を主にして、以て他の二面に向ふ様に務むるが可ならんと思ふ。其の故は之を儒教の上に照すに、孔夫子は大學に教へて云く「天下を平にせんと欲せば、先其の國を治む、其の國を治んと欲せば、先其家を齊ふ、其の家を齊へんとせば、先其身を修む、乃至身修つて而して後に家齊ふ、家齊うて而して後に國治る、國治つて而して後に天下平なり」とありて、一己の修身を先づ第一着とし、平天下を而して後の終極とせるもの、是れ常時

孔夫子の
教訓

の教であるから、かく示されたものである。若一旦緩急非常の事變の秋に際して、猶此教に拘泥して、個人的面の修身を先として、國家を後にするものは、是れ所謂舟中の大學なるものにして、誤れるの甚しきものと云はねばならぬ。仍て非常の時即一旦緩急あれば、義勇公に奉じて國家的面に對して、個人的面は捨て、掛らねばならぬ。又之れを佛教の上より考るに、常時に在ては自行自信を主にして、以て教人信の利他行に及ぼすやうにせねばならぬ。仍て「後生は一人のこのぎなり、一人く佛法を信じて、淨土へ參る可きなり」と惠燈大師は教へ給ひ。又高祖見眞大師は「五劫思惟の本願と云ふも、兆載永劫の修行と云ふも、只この親鸞一人が爲なりけり」と自身の喜びを先にすべきことを教へ給へり。然れども一宗の興廢に關すると云ふ

様な、非常事變の起りたるときは、我身さへ喜で居ればよいとすましては居れぬ、其際は宗教的面に對して、個人的面を捨て、粉骨碎身の報謝をせねばならぬ。例せば惠燈大師の御時代に、叡山及三井寺の關係より、大進下間法橋等の十八人、及堅田源兵衛が生首を差上て、報謝の誠を抽んでられしが如く。又顯如上人の御時代に、織田信長と石山城戦争の際、數多の信徒は身を彈丸雨飛の下に捨て、報恩をせしが如く、今日とてもいよく佛教の存亡に關すると云ふやうな、大事變起りしときは、我々信佛の徒は、自身さへ信を得たればそれでよいとは云て居れぬ。財産を抛ち一身を犠牲に供して、宗教の爲に盡すの覺悟がなくてはならぬ。又國家非常の時、即ち日清、日露、日獨の如き時に際して一身の安危、一家

○三面的の吾人なるを知れ

の盛衰のみに注目して、帝國はど一なるが、佛教はいかゞな
 ろうが、ど一でもよいと云て居るやうな、腐れた精神を持た、
 不忠不義の國賊、獅子身中の虫は、實に死で呉れてもど一でも
 よい奴トや。苟も大和魂を有し、學佛大悲心の徒は、不惜身命
 不惜財産、個人的面を忘れて、國家と宗教に、盡さねばならぬ
 秋である。

忠臣蔵の例

諸君は、彼の忠臣蔵の芝居を見られしならん、彼の大星由良之
 介より、寺岡半右衛門に至る、四十七士と、小野九太夫と、何
 れが最負にふります。彼の四十七士は、主君の爲に一命を抛ち
 遂に師直を打亡し、高輪泉岳寺に於て、潔く切腹せし一條は、
 忠臣義士の鑑として、千歳の今日假粧の演劇を見ても、感泣せ
 ぬものはありますまい。小野九太夫はさうであります、個人的

の獸欲心のみにして、主君の御爲も、大義と云ふことも何とも
 思はぬ、我身さへよければ、他はさうでもよい、主君が切腹な
 されたら、殘た財寶を割取て、帳面算盤の目を弾くとも、兎角
 浮世は色と酒、酒色の二に心腸腐した奴トやゆゑ、主君切腹の
 場に居眠りして居たであります、何と小面憎い奴トやありま
 せんか。彼の日清の大戦争に方ては、恐多くも一天萬乗の天皇
 陛下には、九重の宮城を御離なされ、親征大元帥の資格を以た
 せられ、遙々廣島迄御下りあらせられ、狹隘粗糲なる第五師團
 に御駐輦遊ばされ、日夜に焦心苦慮在まらしてあるのに、下民た
 るものが知らぬ顔して居眠て居ては、全く九太夫の末孫である
 今日日本に於て、九太夫の末孫が多數を占めては、萬國無比
 の皇國も、萬國無比の佛教も、ともに滅亡して仕舞ふ。しか

りぬれば數十萬圓の御金はありても、金を枕に身を果さねばなりませぬ。今日に在ては大學的の教、猶舟中の大學たるを免れざるに、況や九太夫的では萬々相成らぬ故、四千萬の同胞臣民は、彼の四十七義士の如く、國の爲に、教の爲に、身命も財産も抛て、最後の戦勝を期せねばならぬ、私は狂歌をよみました諸君此心になられんことを乞ふ。

國の爲教の爲に己が身を捨て、進めよ法の大丈夫。

梓弓はればたちまち雨と降る敵の矢さきによし斃るとも。

眞の幸福者

諸君は、此の酷暑焚が如く、蒸すが如く、金石爲に鑠し、草木將に枯死せんとする、三伏炎天の時下をも御厭ひなく能ふこそ

參聽なされました。實に諸君の宗教に冷淡ならずして、御熱心の程はいとゞ感心の至りである。去り乍らいかに諸君が御熱心なればとて、此の煩熱耐へ難き際に、あまり長演説を致しては返つて御迷惑でありませう故、今日は簡短に且、あまり聞分け難き様を、理窟めきたることは止りにして、淺近にして了解し易き御話を、鳥渡致しませう。

諸君、今日の演題は、眞の幸福者と申すのであります。抑々幸福を望で、不幸を厭ふは、社會萬人平等是一である。然れども其の幸福てふものに、眞と假との別あることを知らねはならぬ。單に現世一旦、草葉の露の命あらん限りの、肉欲の快樂を満たすをもつて、幸福とするが如きは、幸福は幸福に相違なければ、眞の幸福にはあらずして、假の幸福と申さねはならぬ。何

假の幸福に眞

となれば、いかに七珍萬寶は倉庫に充溢し、綾羅錦繡に身を装飾し、美室才子は家に壯健に、出るに車あり、食ふに肴あり。夏は暑を清涼の地に避けて、温泉に沐し海水に浴し、冬は温暖の美屋に籠り、四山の白雪を酒や歌の間に賞し、何一として不足なき榮華を極むといへども、一夜無常の嵐來て露の命を吹落しなば、榮華は散て徒らに他の有となり。妻子は壯健なるも、獨生獨死獨去獨來にして「ひとり來てひとり趣く路なれば、つれてもゆかずつれられもせず」七珍萬寶は充滿すと雖、珍寶及王位、臨命終時不隨者として、壹厘半錢も携へて往くことばならぬ。其時に方りて只身に隨ふものは、造り置きし罪のみなり、故に古人も「つくり置きし罪を友にて知る人も、なくなくこゆる死出の山路」と詠ト置けり。爾らは現世一旦の幸福は、

ひさり來ての句

夢の如く假の榮華と申さねばなりません。い。

爾るに西洋にてアリストートル、プラトーンに起原し、ペンザムに大成し、近ろ佛國にジュモン氏、英國にミル氏ありて、之を祖述せる實利學と稱する者ありて、つまり夢幻の浮世の間の快樂を遂るを以て實利とする趣なるが。吾輩より之を見るときは決して實利とは申されませぬ、假利學と名稱して至當たと思ます。然れば眞の幸福者とは、いかなる者を申すかとなれば、眞宗眞俗二諦の妙教を聞開き、先眞實之利一念大利無上功德である、六字の嘉號を得て、未來の大事に安心決得し、而て現世逗留の間は、人間の有様に任せて、なる可き丈立派に世を過し、兩手に花の仕合を全したなら、是れこそ眞の幸福者と申すものである。然れども今世の幸不幸は、一は勤と惰の如何によると

幸不幸の
四句分別

かいへども、又過去の約束に由来する邊あるが故に、勤れども貧しく、遊べども福に暮す例なきにあらざとせす。之に仍て佛教によく用る、單々俱是俱非の四句分別を以て、世界の人類を分つと、一に幸福而不幸人、二に不幸而幸福人、三に幸福而幸福人、四に不幸而不幸人となつてまいりませう。一に幸福而不幸人とは、今世はたどひ全盛極る福樂なる生活を致すと雖、其の福樂に耽りて未來を誤り、阿鼻の炎に焼かれては幸福而不幸人と申さねばならぬ。蓮如宗主の「堺の日向屋は、三十萬貫持たれども、此度死して佛にはならず」と歎き給ひしが如きは是れである。二に不幸而幸福人とは、今世は不幸にして貧に苦み病に悩み、短命にして夭折すと雖、來世安養界に至て、妙果を證せば幸福者である。かの大和の了妙は冬の寒さにも、

唯一枚着兼ぬ候へども、此度死して佛になるよと、蓮如上人のほめ給へるが如き人がこれである。三に幸福而幸福人とは、月蓋長者須達長者等の如く、現當二世の福樂を極むる、謂所從明入明從樂入樂の人を云ふ。四に不幸而不幸人とは、今世も後生も共に苦む、所謂從冥入冥從苦入苦の人を云ふ。就中第四は眞の不幸者である。第一は假の幸福者である。第二は眞の幸福者なり、第三は眞の最大幸福者である。此の四類の分ちある中に、眞の幸福者に入る者果して幾何かある。吾輩一夜四隣寂々、孤燈明滅の下に、枕を欷て閉目開目して、世の實相を觀想するに、實に第一第四の人類に屬する者のみ多くして、第二第三の人類に入る者の最少からんと、一念爰に至る毎に、轉た愁歎の情に堪へず、落涙衿を濕すことであります。希くは第

四類の人をして、せめて第二類の人とならしめ、第一類の人物をして、第三類の人とならしめて、折角拔苦與樂の佛教に、値遇せる所詮を全したきものであります。エーあまり暑氣が烈しくあります故、今日は先これで退場致します。

婦人教會に於て (其二)

私は當越前の國には初めて出張致し、満場の諸君と初對面に、今一場の演説を爲すの幸榮を得た譯で御座りますが。扱御互に相會することは、勿論離別とは違て嬉しきものであります。別して今日は諸君と初面會に當り、重々に喜ばしく御芽出度と申度事が御座ります。それは先今日高祖大師の降誕會が、中興上人の御遺跡ある、此の超勝寺に於て、斯く賑々布執行せらるゝこ

とが御芽出度御座ります。又今日に最必要を感じて開かれたる此の藤島婦人教會が、降誕會と、もに誕生して、斯く發會式を舉行せらるゝことが御日出度御座ります。扱此の婦人教會が、方今は三府五港を初として、津々浦々に至る迄盛大に行はるゝことにて、私も今月は至つて婦人教會に縁深くして、過般來京都婦人教會に出演し、それより江州の神愛婦人慈善會を巡回し、然して當國の此の婦人教會へ出張した様な次第で御座りますが。扱て斯く到る處に婦人教會を盛大に行ふは、或は一時の流行を追て然るものゝ如く思はるゝ諸君もあるか知れぬが、決してそんな輕々としたことより起るものではないとせぬ。猶此頃蚊が来る故に、之を防ぐ所の蚊帳を用ひねばならぬと云ふ必要が起り、疾病が流行する故に、醫藥の必

○演説の部 百五十二
要を感じるが如く、すべて天下の事は、必要を感じて起るものであります。今婦人教會も、開設せねばならぬと云ふ必要を感じればこそ、斯く盛に起るのである。決して彼の御方も束髪に御結たから、妾も束髪にしようと思ふ如き、人真似や流行を追ふと云ふ譯ではありません。然れば何故婦人教會が是非必要たかと申すに、是は婦人程世の中に於て、大切なる位地にあるものはないと云ふことが、分明になつたら自然と分つて來ます。從來日本の風習で云へば、婦人と云ふものは、兎角男子より權利も薄く、隨て義務も輕きものゝ様に、自他ともに口にも云ひ心にも信じて居た様ですが、是れは大なる間違でありました。實に婦人女子程、社會に重大なる義務を負擔し、重要な地位にあるものはない。其故は抑も婦人女子は若之を國家的より云

へば、即ち國家の大本であります。若之を教法的より云へば、即ち宗教の本源であります。何故婦人が國家の大本を爲すかと申すに、之に付ては、先國と云ふものから解釋を下し置かねばならぬ。
扱國とは勿論山川野原の謂に非ずして、即ち人民の團體に名けたものです。語を替へて之を云へば、人民は國の要素にして、國は人民の集合體なりである。乃て國に於て文明國とか半開國とか、野蠻國とか云ふクラス、即ち階級の付くのは、何にも山河野原の良否に關するに非ずして、即ち人民の氣風に依るものです。人民の氣風高尚豁達なれば、其の國は即ち開進し人民の氣風野卑頑愚なれば、其の國は即ち野蠻となるのです。而して其の氣風なるものは、即ち人の智徳に依るものである。

智徳の二と云ふものは、猶し身體に於ける目と足の如きものにして、智の目、徳の足、兩全せざれば以て完璧の人と爲られぬ。智識が幾等進んで居ても、道徳なき人は、眼ありて足なきが如く、又道徳は修りてあつても、智識がなければ、足ありて眼なきが如く、何れも片輪者たるを免れぬ。況してや智の目、徳の足、共に闕くるの輩なれば大不具者である。片輪者や、大不具者は、自ら氣風も卑陋下者になるは喋々を要せぬことである。之に反して智目、徳足、全備したる完全なる人である時、自ら氣格高尚に上進します。仍て是等の人民の集合せる團體、即ち國家が文明の國、開化の土と稱揚せらるゝのである。扱其の智徳なるものは、即ち教育より成るものにして、目今世の中に智育徳育と云うて八箇間布ことです。世の諺にも氏より

育と云うて、教育程人間社會に必要なものはない。乃てこれは教育學と云うて、大切な一學科に迄加へて研究致します。扱て人は教育せねばならぬと云ふことに付て、西洋の有る教育學者は、一の面白き試験をしたことがあります。それは有家の兒子が生れ出るや否や、有る山中に羊を畜て居る暗啞の老嫗に托して、相當なる方法を以て、七ヶ年間養育せしめ、而后に其子をは里の家に連れ歸りし所、奇なる哉や今の兒子は、只羊の聲音を發するのみにて、更に人語を解し、また人聲を發することが出来ない。然るに人里に出して、父母の間に養育せられたるは、速に人語を習ひ、更に通常人と異なることなき様になつたそうです。是初は暗啞の嫗と群羊の間に養育せられし故、更に人語を聞かず、只群羊の鳴く聲をのみ聞居りし故、殆ど羊と一

般なる有様になつたのです。是にて諸君は定めて教育の必要なることは知られたでしょう。扱其の教育と云ふことに付ては、場所と云ふものが必要であります。此頃農民が田植のころへをして居りますが、彼等が稲を作るにも、何處へなりとも植付てさへ置けば、稲が出来ると云ふ譯ではない、若し紐をは山頂や砂原に蒔置たら、聊か芽位は出すか知らぬが、決して秋になつて米を得ると云ふことは出来ない。乃ち稲を作るには相當なる苗代に紐を蒔き、而して田植頃になるとその苗を分て、それ／＼相當なる田地に植付け、それより幾度となく雑草を取除き又は肥を入れるなどして、漸く秋になりて米が得らるゝのである。人も生れ乍らにして賢人君子はなき故に、何れの處に放置くも人になると思ふと、大きな間違にて、必ず之を教育する

苗代田地に入れて、注意に注意を加へて教育せねばならぬ。扱其の教育の田地、即ち場處に付て、學者の論に或は三段、或は四段と分ちます。今は四段教育の具さなる方に付て辨トまじよう。扱四段の教育とは、第一が胎内教育、第二に家庭教育、第三に學校教育、第四に社會教育であります。胎内教育とは、十月間母胎内に宿れる兒子を、母親の注意を以て教育するを云ふ。家庭教育とは、兒子生れて六七歳頃迄、家庭に在りて教育を受ける間を指し、學校教育とは、即ち六七歳にして小學校に登り、それより中學大學等にて教育を受けるを云ふ。社會教育とは學校を卒業したる後、社會に出て實業に従事し、公衆と交際を結ぶ間に、社會公衆より不知不識の間に教育を受けることであります。

婦人教會に於て (其二)

胎育の家
庭の必要

扱、此の四段教育ある中に於て、最も大切なるは、諸君何れの教育でありませうか。忽ちにして之を思へば、學校教育が第一大切である様ですが、決して然らずです。之を理論に訴ふるも之を古今の實踐に徴するも、初の二段、即ち胎内家庭の教育が一番大切であります。何故となれば、此の胎内家庭の教育を受ける間が、即ち人間一生の足の踏出でありまして、善惡賢愚の由りて分るゝ濫觴にて、所謂一步千里の違の起点でありますから、世の諺にも、三つ兒の魂が百迄とやら申して、實に此の間の教育が最必要であります。乃て彼のロールド、ブルীগム氏の、幼兒生れて四年の間に得る所の智識は、老後に於て得る所

師は針の
糸の如く
如く子
の如し

よりも遙か多きものなりと云はれました。然り而して其の教育中、最も必要なる胎内家庭教育の教師は誰の任でありますようか、即ち母親でありませう。師は針の如く弟子は糸の如くありて、教育に付ては教師と云ふものが大切であつて、母の師が賢善なれば、其子も自ら賢善に進み、其の母も頑鈍なれば其子愚鈍に墮するは免れざるの數でありまして、氣象高尚、性質温厚の賢母にして、胎内の教育と云ひ家庭の教育と云ひ、宜きを得たる幼子は、爾後學校に入りては、常に校内の優等生となり、社會に出でゝは、能く順應を求めて富貴榮達を得ます。仍て古來或は一國文明の先導者と爲り、或は一大事業をも起したる、英雄豪傑拔群の士は、多くは賢母の教育宜きを得たるに根基して居ます。

○婦人教會に於て

支那にて申すなれば、世人の了知せる彼の孟子は、孟母の三遷
 斷機の教育によりて、かく聖人と爲り得た。又泰西各國にて申
 すなれば、米の合衆國の獨立を企圖せしワシントンは、幼して
 父を失ひ、専ら賢母の教育を受けたる人です。又英國の共和政治
 の保護役に立ちし、クロンウエル氏の如き、其の他之を事業家
 にしては、ナポレオン、ウエルリントンの如き、之を政事家に
 してはハブルールハン、カンニング、アダムス、之を學者にして
 はペーコン、エルスキンの如き、之を史家にしてはミシユレー
 の如き、之を教法家にしてはウエレスリの如き、日耳曼の詩人
 ゲーテ、和蘭の畫士シエフェル、是等の英雄賢人は、皆是賢
 母の教育宜きを得しより身を立てし人である。ナポレオン一世
 嘗てカンパン夫人に向つて謂ふには、教育の舊法已に其の價格

を失へり、今や人民教育の爲に欠く所のものは何ぞやと、夫人
 は之れに答へて、只一言に母也と云ひました。ナポレオンは之
 を聞き、實に感嘆して止まなかつた。而して又言ふに、只此の
 母也の一語に於て教育の法備はれり、然れば世の母たるものを
 して、此の兒子を教育する道を知らしむるは、實に夫人の任な
 りと云ふたをうです。又ヘンリー、ベスタロシー氏は、吾人を
 教へ育つるの任を以て、之れを其の母たる者に荷はしめんこと
 を考へ出せり、即ち我は學校に在るところの兒童を以て、之を
 靜なる室内に移さんとす云と云へり。上來の所辨之を要するに
 國の本は民なり。故に國の開否は人民の氣風に依る、氣風は
 智徳に依る、智徳は教育に依る。而して教育中最も要なるは胎
 内と家庭なり、其の教師は婦人の任なり。乃て婦人は隱然に國

婦人は教
法の本源

家の大本を爲すものたと言ふことは、諸君に於ても御異論は吐
けないでありませう。
是れより更に一步を進めて、婦人は教法の本源を爲すものた
申すことを辨へませう。何故婦人が教法の本源を爲すかと申
すに。抑も婦人と云ふものは、特に宗教に信入し易き心性を帶
て居ります、と申すは、蓋し物事に小間氣の附くこと、感情の
深きとは、是れ婦人の特色と申しても宜しかろう。其證は、鳥
渡人と交際する間にも、直に衣服の縞柄或は良否を見て取つて
居ます。仍て其の人去りたる後に、そろそろ其の評が出来て
今の人に着て居つた着物は双子であつたとか、又秩父縞であつ
たとか、又縮緬であつたとか。また羽織は立派に見へてあつた
けれども、肩の邊が少し破れて居たとか、何とか角とか頼みも

婦人の深
情深き證

せないことに世話らしう評して居ります。私杯は一向にそれら
のことに氣が付き兼ねまして、後より今の人は何な衣服を着
て居た杯と問ふと、多くは答の出来ない方でありませう。之が
婦人は、男子と異つて、小間氣の附く證據です。又感情の深ひ
證據は、演劇場杯で實檢するに、此間も京都にて忠臣藏の芝居
がありませう故、古めかしい乍ら見物に参りませう處が、例の
鹽屋判官が切腹の段とか、又勘平の割腹の場になりますと、男
子は多く平氣を見て居りますが、婦人は大抵皆潜然と落涙して
居るのを見るに付まして、成程婦人は感情が深ひと云ふことが
分ります。仍て其の小間氣の付き易ひと、感情の深き所より、
他人の死去杯の噂を聞きませうと、深く自ら感得て後世の大事
に驚を立て、小間氣を以てクヨクと案する様になります故、

○婦人教會に就て

婦人は宗教に信入し易き特性を帯て居ると申すのです。
 扱其の宗教に入り易き婦人が、一家の主婦となつて、深く宗教を喜んで居りますと、其の子は勿論其の夫迄が、其の有難やと喜ぶ聲、尊やと振舞ふ相たを、見るに付け、聞くに付け、實にもと思ひて同トく宗教心を起すやうになります。一家已に斯くなる、之が決して一家に止まるものでない、徳孤ならず必ず隣有りて、遂に隣家に及び、それより一村、一郡、一國、全天下に及ぶものです。所謂一家仁なれば一國仁を興し、一家讓なれば一國讓を興す、又君子は家を出でずして、教を國に爲すの道理にて、一家主婦の喜法は、終に世界中に弘教するの本源をなすものである。仍て彼のボレーヌ、ワルボール氏は、一個の婦人も新宗教の開山たりしことなし、然れども一個の宗教も婦

一家仁なれば一國

婦人は三世諸佛の門

人の助力を得ずして、傳播したるはなし」と申されました。成程此の言の如く、婦人が開山となりて開きたる宗教と云ふことは聞かないが、尤も天理教は大和の或婆々が開ひたとか云へど之は度外なり。多の宗教は必ずや、先づ婦人の助力せしより傳播して居ます。一例を擧て申すなれば、彼のマホメツトは、亞刺比亞に於て初て回教を唱へしとき、最初の程は、誰一人も信仰せざるのみならず、來聽すらせざる故に、マホメツトが計を回らし、先づ我が妻に深く之を信せしめ、而して妾に及ぼし、それより妻妾の助力を得て、遂に天下に押出して已來、今日迄流行してあるのです。

尙進んで之を云へば、其の宗教の開山となる人も、又十方諸佛と云ふも、其の本を云へば、皆是れ御婦人方の生出なされた也

のでしよろ。乃て古人は、婦人を三世諸佛出世の門と云へり
又一休禪師は、或時大道に於て一婦人に向ひ、合掌禮拜しつゝ
「女をば御法の藏といふぞゆに、釋迦も達磨もひよいゝと生
む」と狂歌せられたとか申すことです。爾れば女子は佛法の藏
である。是の如く辨と去り論と來りて見れば、實に婦人なるも
のは、宗教の本源であると申すことも、諸君御異見はあります
まい。されば婦人女子は國家の大本です、宗教の本源です、か
らして婦人程貴重なる地位に立ち、重大なる責任を負擔する者
は世の中れない。乃て若し婦人にして婦徳を全ふし、文明の賢
母、弘教の良婦たるの責任を全ふするに至れば、本立て道成る
の道理にて、自ら國權も擴張し、國威も輝き、佛日も彌々増輝
するに至ります。物に本末あり事に終始あり、前後する所を知

れば道に近しですから、苟も愛國の精神と、爲法の道心を抱け
るものは、君子は本を務むで、必ずや先づ婦人女子を教育養成
して、賢母良婦と爲ねばならぬ。是れが即ち方今至る所に、婦
人教會を盛んに設立する理由にして、決して一時の流行を追て
然るものではありません。即ち本會を設立せられたるも、此の
趣意より外ありませんことは、本會規則緒言を一讀せられたら
明了です。

扱一般の婦人教會に付て見まするに、其の主義目的に付て申せ
ば、少々宛差異があります、本會は規則に見へたるが如く、
佛教中特に眞宗の二諦兩全の教義を以て、婦道を養成する目的
であります。古人の語に「麻中の蓬、管中の蛇」と申すことがあ
りまして、蓬なる者は横さまに繁茂生長する草なれども、麻中

にあれば眞直に生長します。又蛇は曲り易き性質の虫なれども管中に入るれば直になります。今凡夫は悪性更に止め難く、心は蛇蝎の如く、又蓬の如く横着根性でありますけれども、眞宗の麻の中六字の管中に入れて之を教育せば、自ら一心制意端身正行の身となりて、進では文明の賢母となりて社會の程度を進め、退いては弘教の知識となりて、佛教の助手を致す様な、賢母良妻を養成したい積りでありますから、何卒諸姉方は、此の趣旨が明になりましたら、互に誘引して本會に加入せられんことを切に希望致します。

道徳の必要 (其二)

私は前に佛教の目的といふ演題を掲げて、佛教の目的は人の人

たる智徳を、兩全せしむるに在りといふ冒頭を掲置て、而て智育の一邊丈を辨ずる間に、意外に下手の長談義となりました故一先辯士の交代を致しました。退て考るにあれ限りにして捨置きましては、頭が有て尻がない幽霊の如く、一眼ありて兩眼具足せぬ片輪の如き演説となりますから、是から又題文は種々に變換しても、ツマリ佛教に依て道徳を養成せなければならぬといふことを辨して、前題の局を結ぶ積りで与ります。就ては先今席は左に掲けたる、道徳の必要といふ演題に基ひて、大體道徳と云ふものは、世出世に亘て是非養成せねばならぬ、一大必要なるものたといふ理由柄を少く辨とませふ。

併しかゝる演題を掲げますと、心ある諸君は定めて片腹痛く思召す邊も与りませふ。その片腹痛く思はるゝも厭はず、本題を

掲げて辨ずるのは、私が辨を好んで然るに非ずして、止むを得ざるに出たることを私は悲歎に堪へません。何となれば元來人には道德が必要である杯と申すことは、喩へば人には食物が必要であると申す如きものにして、實は言を待たぬ咄である故に心ある諸君よりは片腹痛く思はるゝに違ひなひ。然れども世に愚人ありて、人身の生理組織の如何なるものといふことを分別せず、人は食物が無くても生活が出来る、空氣さへあれば事足れり杯と論ずるものあれば、否己に先年日本人にして論出せるものがふりましたるが、かゝる人物に對しては決して然るものになひ、人には食物が必要であるといふ、理由を辨して聞かせねばなりませうまひ、道德の必要なることは、食物の人身に於けるよりも甚しきものなれども、世には無道德破廉耻の粗暴奴が多

くして、義理張るより嘯張れ、我れさへよけりや人はドーデモといふ如き、死で呉れてもドーデモよい族がある故に、今是等禽獸同前の輩に對して、止むことを得ず道德の必要なる理由を辨解に及びます。

抑々物事は必要を感じて起るものと、又流行を追うて起るものと、事物の起るにも二種の區別がふります。必要を感じて起るとは申すまでもない、是非なくてはならなひ所由がありて起るものにして、飲食衣服家屋等の如き皆是れです。是等は眞似や流行を逐うて起るといふ譯ではありますまひ。隣家の婆サンが飯を食うて居たから、私も眞似して飯を食うて見よふの、又向ひの翁サンが着物を着て居たから、私も着物を着て見よふのといふ由けではありますまひ。他人は兎にも角にも、吾身は飲食せ

されは飢渴に逼り、着服せざれば寒冷に凍へ、家屋なくんば雨雪に侵さるゝに依て、止むことなく衣食住の必要を感じて、日夜營々として用意に奔走するのでありませふ。又流行を逐うて起ると申すは、即人眞似より起るものにして、隣りの阿嬢サンは西洋流の束髪にしてゐるから、私も束髪にしよう。向ひの悴は洋服を着るから、私も洋服を着よふと云ふ如きは、何にも束髪にせねば生命に關するの、洋服にせねば體育に害があるのと云ふ如き、必要なる理由はなくして、只一時の流行を逐うて起るものである。今道德も只一時の流行物なれば、今更私は左の如き演題を掲げて喋々致しませぬ。實に道德なるものは三世に徹し、十方に遍して一大必要なるものであるから、屹度實行せねばならぬ。されば道德は何故必要であるか、其の理由を是か

ら辨解に及びませふ。
又手道德の必要なることは、諸君已に道德と申すにて明かでもりませふ、何となれば道は道路である、徳は得也の義にて、道を得るといふことである。社會萬般其の道を得ずんば運びが付きませふ、此より彼に至り彼より此に還らんとしても、道を得ずんば往來の目的を達することは出来ませふ。若し道を得ずして往來をして御覽、有時は溝河に轉んで一命を亡ひ、有時は人家の屋上に登りて盜賊視せられ縲紲にかゝり、或は斷崖に行詰る如き迷惑を引きませふ。爾るに當前の道路さへ得て往來せば、公行濶歩千里自由でありませふ。右は有形的の道路に付て喩説したのであります。無形的の道德に於けるも亦是の如きものである。生者必滅の人間社會に於て、生前には生前の